

好生堂頭取役青木周弼

森 川 潤

(受付 2012 年 4 月 13 日)

はじめに

青木周弼は、天保10(1839)年2月、西洋医として萩藩ではじめての藩内居住の一代雇の藩医に登庸される。萩城下に移り住み、藩医としての職務にたずさわるかたわら、新設された萩藩医学校の翻譯掛として異賊防禦のための翻譯にたずさわる。嘉永2(1849)年1月には、萩藩医学校の会頭役に任じられ、教諭役の能美洞庵のもとで、はじめて萩藩医学校の運営にかかわることになる。それは、萩藩医学校内に西洋兵学振興のために西洋学所が設置されたことと無関係ではない。

弘化元(1844)年夏には萩藩内諸郡で、翌2(1845)年夏には萩城下でも天然痘が流行し、多数の死者がでる。萩藩でも、清代までの中国医書を集成した『医宗金鑑』に記載された人痘接種法による種痘がおこなわれたこともある¹⁾が、危険がともなうために定着しなかった。嘉永2(1849)年7月、周弼のもとに、オランダ商館医モーニケ(Otto Gottlieb Johann Mohnike)がバタビアからとりよせた牛痘苗により長崎で牛痘接種を実施し、善感したという知らせがもたらされる。周弼は、実弟の研蔵を佐賀と長崎に派遣し、痘漿と痘痂をとりよせ、9月下旬に臨床実験をおこなう。善感したために、10月になると、萩城下で牛痘接種を実施し、翌嘉永3(1850)年2月以降、藩領全域に拡大する。萩藩領全域における牛痘接種の実施により西洋医学の臨床応用性が認知される。

萩藩医学校では、嘉永3(1850)年8月に校舎が竣工したのを契機として、萩藩医学校教諭役の能美洞庵がはじめての規則書ともいうべき「覺」と「醫學諸流稽古之式」を起草する。洞庵は道三流本道医にすぎない。しかし、萩藩に西洋医学を導入しようと企図し、盟友の坪井信道のもとで西洋医として修業をつんだ周弼を藩医に登用するよう地江戸両仕組掛として天保改革を主導する村田清風にはたらきかけたのは洞庵である。周弼は、洞庵の要請により「医学所規則」案を起草する。同年12月に周弼が起草した規則案に修正がくわえられ、翌嘉永4(1851)年2月には、さらに修正された「医学所規則」と「教諭申聞セノ条」が公布される。こうした過程において、周弼は萩藩医学校でおこなわれていた漢方医書と西洋医書の会読を整理・拡充し、漢方医学課程のほかに、西洋医学の原書課程と訳書課程をもうける。

周弼は、嘉永4(1851)年1月には、御添匙医に任じられる。以後、洞庵が萩藩医学校に専念し、周弼が洞庵のかわりに藩主慶親に近侍することになる。周弼は、安政2(1855)年8月

には御側医に任じられ、文久 2 (1862) 年秋、藩主に扈從し、滞在する京都で病魔におかされるまで藩主に近侍する。周弼は、文久 3 (1863) 年 4 月に能美洞庵の後任として教諭役に就き、萩藩医学校の改革にたずさわる。同年秋には、最後の力をふりしほり、改正規則を起草しただけでなく、建言書をまとめる。周弼が萩の自宅で病没したのちの文久 4 (1864) 年 1 月に改正規則が認可されただけでなく、10箇条の建議も部分的に修正されただけで、裁可される。この改革により、周弼が構想した西洋医学校が一応完結したとみることができる。

本稿では、青木周弼が、萩藩医学校の会頭役としてはじめて起草した「医学所規則」案が修正され、成案、すなわち「医学所規則」として制定公布される過程において、萩藩医により伝統的に築かれてきた漢方医学の基盤のうえに、どのように西洋医学を移植し、学科課程として体系化したか、あきらかにすることを課題とする。なお、江戸期には、儒学の一派として古学が形成されたように、後世方、古医方、折衷派といった漢方医学から派生した流派が形成される。漢方医学は、厳密には漢方系医学、漢方医は漢方系医と表記すべきであるが、本稿では漢方系医学を漢方医学、漢方系医を漢方医と表記する。

I. 申上置侯事

嘉永 2 (1849) 年正月、周弼は手廻組にくわえられ、医学館会頭役に任じられる。翌嘉永 3 (1850) 年 6 月には周弼は譜代藩医にとりたてられる。その 9 日後、周弼の 12 歳年下の弟研蔵と田原玄周が西洋原書頭取役に任じられる。同日、萩藩医学校は濟生堂から好生館に改称し、改築のため明倫館内にうつされる。周弼は、赤川玄悦とともに会頭役として能美洞庵を補佐することになる。

玄悦は、文化 5 (1808) 年に熊毛郡大河内村の藩士金子藤右衛門の次男に生まれ、翌文化 6 (1809) 年に萩藩医赤川分家の養子にむかえられる²⁾。文政 11 (1828) 年に京都にのぼり、漢蘭医学折衷論をとなえる小石元瑞³⁾のもとで医学を修業し、かたわら頼山陽に儒学・詩をまなぶ。天保 13 (1842) 年には、萩藩医学校で「瘟疫論」と「内科撰要」の会読を担当する。玄悦は、周弼より 5 歳年少であるが、折衷的な立場の藩医として会頭役に登用される。8 月には、頭取役の呼称は教諭役にあらためられる。

萩藩医学校は、開校以来、八丁南苑御茶屋内に仮寓^{えむかい}していたが、当初の計画どおり、南苑に新築されることになり、嘉永 2 (1849) 年正月に江向^{えむかい}に竣工したばかりの明倫館内にうつされる。

新築移転が決定したことにより、萩藩医学校はあらたな局面をむかえる。館長である洞庵は、教諭役在職中は役人並に準じ、長柄傘の使用をゆるされただけでなく、萩藩医学校の職務が多忙のばあいには、城中の勤番を免じられる⁴⁾。洞庵は、強い権限を行使するのにふさわしい地位を付与され、萩藩医学校の職務に専念することになる。しかも、西洋医学を研鑽

した周弼がはじめて萩藩医学校の運営に関与することになる。

萩藩医学校は、開校後10年たつ。しかし、出席するものも少ないまま、ほそぼそと医書の会読がつづけられていた。洞庵は、「もうしあげおきそうろうこと申上置候事」を起草し⁵⁾、「西ノ四月」、すなわち嘉永2(1849)年4月に萩藩医学校の振興策を藩政府に上申する。萩藩医学校のその後の展開を方向づける文書であり、全文をあげる。

醫道之儀ハ司命之重任ニして、才一慈悲を専とし、誠實ニ治療仕候要御座候、太平之世ニ而ハ、干戈之患と申亘も無_レ之、慈親孝子、朝夕之憂と致候ハ、疾病之一條ニ候、然レハ、醫術治世救民之一大要務ニも可_レ有_レ之哉ニ奉_レ存候、古語ニ病氣之時、庸醫之手ニ委候は、不慈不孝ニ比ス、醫之拙き病人之不幸ハ不_レ及_レ申ニ、人を不慈不孝之罪ニ陥レ候事ニ候ヘハ、誠以可_レ恐_レ事ニて、謹慎精實ニ修業不_レ仕而ハ不_レ相協_レ事ニ御座候、然處、近世、醫を以糊口ニ仕、種々口俊世上發行仕候輩多く、自然と右之弊風一統ニ推移、修業仕候者も心掛候所、肝要之主意を忘却仕候様相見ヘ、甚に嘆敷事ニ奉_レ存候、此度、醫學館御取建被_レ仰付_レ候は、誠ニ以

御仁恵之御事、萬々難_レ有事ニ御座候ヘハ、才一弊風相改、醫道之本意ニ相叶候様無_レ御座_レ而ハ、不_レ相濟_レ事ニ御座候、乍_レ去、是等之儀ハ讀書修業迄而已にても調兼候もの御座候ヘハ

御上之御威光を以、御褒貶、御引立被_レ仰付_レ、仮令、發行仕候而も、弊風を専とし、心得不_レ宜輩ハ御叱りニても有_レ之、發行ハ左程ニ無_レ御座_レ而も、究民を憐、誠心之治療仕候者ハ御褒被_レ仰付_レ候様御座候ハ、自然と醫風興隆可_レ仕哉と奉_レ存候

一御醫師中、新ニ御役被_レ召出_レ候節ハ、醫學館ニおゐて御詮議被_レ仰付_レ、稽古出精、學術相調候者、御撰挙被_レ仰付_レ、業事同等ニ御座候ハ、前段申上候通、心懸誠実之者、御引上被_レ仰付_レ候ハ、後進之者、勵ニも可_レ相成_レ哉と奉_レ存候

一御醫師中之儀ハ、平士と違ひ、人数少く、在役老幼相省き候ヘハ、稽古仕面々都合相究居候事ニ而、孰レ陪臣其外出席仕候様無_レ御座_レ而ハ、醫學館繁昌仕間敷奉_レ考候處、是以、從來之弊風、世上奔走仕候事を肝要ニ致候ヘハ、如何とも難_レ図御座候ニ付、醫學官出席、出精仕候もの御取り上、御褒被_レ仰付_レ候様御座候ハ、銘々相競出精仕候様可_レ相成_レ哉と奉_レ存候

右御褒被_レ仰付_レ候ニ付而ハ、御詮議振も可_レ被_レ為在_レ候得共、一々御雇被_レ召出_レ候様ニも難_レ被_レ仰付_レ筋も可_レ有_レ御座_レ、何卒格別之

御心入を以

御目見被_レ差免_レ候ハ、無_レ此上_レ難_レ有事ニ可_レ有_レ御座_レ、東都ニ而も諸藩中御目見醫師之御振合も有_レ之、猶他藩ニ而も地下町醫、世上發行之輩、御醫者格と申事御座候様承傳候、如何様之御仕成ニ御座候哉、委事ハ承知不_レ仕候得共

上ニ於而は格別之御費も無_レ之様ニ被_二相考_一、下ニ而は無_二此上_一規模面目ニ相成、難_レ有奉_レ存侯事ニ可_レ有_レ之、何卒、是等之儀も御詮議被_二仰付_一、千金を以、馬骨を求侯例も御座侯へハ、御建立御當分之内一兩人、業事相應之人柄御詮議之上、御引立御褒被_二仰付_一侯ハ、一統競立侯様可_レ有_レ之哉と奉_レ存侯

右之廉々、乍_レ恐下ニおゐて考_レ之處、御内々申出置侯間、程克御詮議被_二仰付_一被_レ下侯様奉_レ願侯事

「醫道」は「司命之重任」であり、「醫術」は「治世救民之一大要務」である。にもかかわらず、藩医のあいだにも「醫道之本意」にもとる「弊風」がはびこっている。洞庵が賀屋恭安とともに建言し、萩藩医学校を創設したのは、こうした「弊風」をただし、「醫道之本意」にたちかえらせるためである。

貝原益軒は、医術についてつぎのように述べている⁶⁾。

萬民の生死をつかさどる術なれハ、醫を民の司命と云、きハめて大事の職分なり、他術ハつたなしといへども、人の生命にハ害なし

ほかの諸術のばあいには拙劣であるとしても、人命にはかかわることはないが、医術は人命に直結する。太平の世には戦乱の不安もなく、いつくしみ深い親や親孝行の子どもの憂いといえは、疾病だけである。医術は、「治世救民」の一大要務である。『童子問』には、つぎのようにしるされる⁷⁾。

病^{やまい}を治むるには^{おさ}須^{すべから}く良^{りよう}醫^いを求むべし。庸醫^{ようい}に委ぬべからず。ひとたび其の治^ちを誤^{あやま}るときは、則^{すなわ}ち百^{ひやく}の良^{りよう}醫^い有^いりと雖^いども、其の後^{のち}を善^よくすること能^{あた}わず。

庸医、すなわち「技ノ拙キ醫者」(『新編大言海』)にかかれは、病人を不幸にするだけでなく、ひとを不慈不孝におとしめる。医業にたずさわろうとするものは、慎みふかく、誠実に修業しなければならない。にもかかわらず、生業として医業にたずさわりの、修業にはげむこともなく、もてはやされる庸医がおおい。このころには、医者が「医道の本意を失い、猥りに驕奢に誇り」、「病因を探り得てその病苦を救ふ」ための修業をおこたっているという世評があった⁸⁾。

こうした「弊風」が認識されていたのは、萩藩だけではない。高知藩では、天保15(1844)年11月につぎのような触書がだされる⁹⁾。

近年、醫師風俗不_レ宜輩モ有_レ之候趣相聞如何之事ニ候、元來重キ人命ヲ司ル職ニ候へハ、向後仁術ノ實意ニ基キ治療致侯儀肝要ニ候條、依テ醫風糾方ヲモ被_二仰付_一候上ハ醫業一切ノ儀ハ醫學館ノ可_レ受_二指図_一事

高知藩では、「重キ人命ヲ司ル職」にある医者の方々の風俗をただすために、領内の医者を医学館の監督のもとにおく。秋田藩医学館、熊本藩再春館でも、同様に医業統制にふみきる。

好生館の新築にあたり、こうした弊風をあらため、「醫道之本意」にたちかえらなければ

ならない。そのためには、好生館における「讀書修業」だけをあらためるだけでは不十分である。「御上之御威光」により、賞罰を徹底し、弊風にそまる庸医をとりしめし、真心をこめて治療にあたる医者を褒賞するようにすれば、医風はあらたまる。

坪井信道塾で周弼と同門であった緒方洪庵は、「扶氏医戒之略」12カ条を門人にしめす。洪庵は、ベルリン大学教授フーフランド（Christoph Wilhelm Hufeland）が著した『医学必携』（Enchiridion medicum oder Anleitung zur medicinischen Praxis）をオランダ人ハーヘマン（H. H. Hageman）が蘭訳したもの（Handleiding tot de geneeskundige praktijk）を重訳し、安政5（1858）年から文久元（1861）年にかけて『扶氏経験遺訓』として板行する。「扶氏医戒之略」は、『医学必携』の巻末にしるされた医者にたいする戒めを要約したものである。その第1条にはつぎのようにしるされる¹⁰⁾。「醫道之本意」は、そこに集約されていると考えられる。

醫の世に生活するは人の爲のみ、をのれがためにあらずといふことを其業の本旨とす。

安逸を思はず、名利を顧みず、唯おのれをすて、人を救はんことを希ふべし。人の生命を保全し、人の疾病を復活し、人の患苦を寛解するの外他事あるものにあらず。

萩藩医学校は、藩医のなかにもはびこる「弊風」をただし、「醫道之本意」にたちかえらせることを課題として生まれる。洞庵は、「醫風興隆」の方策について具体的に献策する。

第1に、「御醫師」、すなわち藩医を御添匙医などの役につけるさいには、医者としての資質や技倆がそなわっているか否か、好生館において審査する必要がある。藩医は、武士と同様に嫡子をとどければ、封禄を相続することができる。藩医の地位は、医師としての資質や技倆ではなく、出自により世襲される。なんらかの資格審査を導入すれば、誠実篤学ものを抜擢することができるだけでなく、後進が研鑽するための励みになる。

第2に、好生館における教育・学習をさかんにするためには、藩医だけではすくないために、陪臣医などにも出席を奨励しなければならない。武士にくらべれば、藩医の人数は少なく、役付きのもの、老齢者のもの、幼年のものをのぞけば、出席修業するものは寥寥たるものである。陪臣医などをうけいなければならない、好生館が活況を呈することはない。好生館の授業に出席し、精励したものを登用し、褒賞すれば、医生が切磋琢磨するようになる。

第3に、洞庵は世襲制の枠をこえ、藩医を1、2名抜擢するよう提言する。江戸では、坪井信道のような「御目見醫師」、すなわち町医や地下医のなかから藩医に抜擢されたものがある。他藩でも、たとえば佐賀藩の伊東玄朴のように、民間の医者の中から藩医に抜擢されるという事例もある。「千金をもって馬骨を購う」という故事もある。萩藩では、萩、山口、三田尻の市街地が町方まちかたと呼ばれ、郡奉行の管轄地は地方じかたと呼ばれる。町方で開業する医者は町医であり、地方で医業にたずさわるものは地下医と呼ばれる。萩藩では、文政6（1809）年12月に斎藤方策を在坂御雇の一代藩医に登用したことがある。方策は、明和8（1771）年、佐

波郡一本松の地下医斎藤玄昌の子に生まれ、三田尻在住の藩医能美由庵のもとで道三流の漢方医学をまなぶ¹¹⁾。寛政元(1789)年に京都の小石元俊の門にはいり、さらに江戸におもむき、大槻玄沢、宇田川玄真に師事する¹²⁾。方策は、寛政12(1800)年ころ大坂にもどり、開業し、のちに藍塾をひらく。「大阪随一の臨床医」の名声を得た方策は、文政6(1823)年12月、由庵の養嗣子友庵の推薦により萩藩の在坂御雇の一代藩医に登用される。

「申上置候事」は、核心にせまる。周防大島の地下医の出である周弼の処遇についてである。周弼が藩医に登用され、「異賊防禦」の職務にたずさわり、すでに10年の歳月がながれる。周弼の藩医登用にさいしては、地江戸両仕組掛として天保改革を推進する村田清風、藩主御側医の能美洞庵と坪井信道には、それぞれに思惑があった。暗黙のうちに相互の意見が一致したのは、蘭学者である周弼にさしあたり「異賊防禦」の職務にたずさわらせ、ゆくゆくは坪井信道門下の逸材である周弼に萩藩医学校の運営をゆだねようという点であろう。萩藩では、弘化4(1847)年2月に青木研蔵、東条英庵、松村太仲が西洋書翻訳御用掛に補任され、「異賊防禦」の職務にたずさわっていた。洞庵は、すでに周弼をその専門としての職務と医学教育にたずさわらせる時期がおとずれたと判断する。藩主慶親の内諾を得たうえで、周弼をみずからの補佐役である萩藩医学校の会頭役に抜擢したのはそのためである。およそ1年後の嘉永3(1850)年6月、周弼は譜代藩医にとりたてられ、同時に手廻組にうつされる。そのころ、周弼は村田清風にあて挨拶状をしたため、「先生多年御懇ニ引立被下候故と奉感銘侯」とする¹³⁾。清風は、周弼の医師としての才幹をみとめ、つねに後ろ盾になっていたのであろう。

「申上置候事」は、藩主慶親が天保8(1837)年4月に襲封して以来、御側医として近侍してきた洞庵が医学教育の将来像を慶親に披瀝し、賛同を得たものである。洞庵があらためて周弼を補佐役に登用したのは、萩藩医学校に本格的に西洋医学を導入しようという意思をしめしたものである。しかし、学科課程については言及されない。家業として連綿とつづけられてきた医者養成の機能は萩藩医学校という教育・研究機関にうつされなければならない。

II. 牛痘接種

弘化元(1844)年には4月から5月にかけて萩藩内諸郡で、翌2(1845)年6月にも萩城下でも天然痘が流行し、多数の死者がでる。江戸中期に、清代までの中国医書を集成した『医宗金鑑』^{そうきんかん}が長崎に舶載される。安永7(1778)年に、その種痘編だけを抜粋した『種痘心法』が板行される。同書には、人痘接種法が記載される。萩藩でも、化政期に人痘接種法による種痘がおこなわれていたが、危険がともなうために定着しなかった。

イギリスの開業医ジェンナー(Edward Jenner)が1798年に『牛痘の原因および作用に関する研究』(An inquiry into the causes and effects of the Variolae vaccinae, a disease discovered

in the Western Counties of England, particularly Gloucestershire, and known by the name of the Cow Pox) を発表し、天然痘予防のための牛痘接種法を公表する。日本ではじめて牛痘接種法の情報を耳にしたのは、長崎通詞の馬場佐十郎である。佐十郎は、享和3(1803)年ころ、オランダ商館長ドーフ (Hendrik Doeff) からつぎのような話を聞く¹⁴⁾。

頃^{このころ}，入津ノ我和蘭船ヨリ持来レル我国ノ風説書ヲ見ルニ，近来^{ちかごろ}，牛痘ヲ取テ，人ニ植^{うゆ}ルニ，其功人痘ニ勝ルコト拔群ナル由アリト，予思フニ，遠カラズシテ其法ヲ記シタル書冊，舶来アルベシト

幕府天文台の蜜書和解御用の任にあった佐十郎は、松前に幽閉されていたロシア海軍軍人ゴロウニン (Василий Михайлович Головин) からロシア語をまなんでいたが、文化10(1813)年、千島択捉島の会所番人であった中川五郎治が前年に抑留先のロシアからもちかえった「牛痘ヲ人ニ植ユル法ヲ記シタル」「一小冊」を翻訳する¹⁵⁾。ロシア語でしるされた種痘書の訳書は、『遁花秘訣』と名づけられる。「遁花」とは、天花、すなわち天然痘から遁れる、という意味である。『遁花秘訣』は、ジェンナーの牛痘接種法を日本に紹介した最初のものである。

牛痘接種法の解説書は、すでに長崎に舶載されていたであろう。萩藩でも、弘化期に痘瘡が流行すると、天然痘の予防法に関心をもち、蘭書の翻訳にたずさわるものもあらわれはじめる。牛痘接種法を実施するためには、技術的な解説書が欠かせない。しかし、なによりも痘苗を入手しなければならない。

周弼は、長崎遊学中の門人阿部魯庵からの嘉永2(1849)年7月20に日付の書簡をうける¹⁶⁾。

當秋、蘭船牛痘持渡、種痘仕候處、幸傳染仕、此節ハ崎陽小兒四五十人も致し居候、尤、阿部伊勢守様より之命之由にて、痘種不_レ絶様被_レ仰付_レ候由ニ付、當奉行所よりも市中一統御沙汰相成、未ダ痘瘡不_レ仕兒ハ尽ク姓名書出ニ相成申候、追々、江戸よりも醫師下りニ相成候趣ニ御座候

當時ハ此地種痘ノミノ騒ぎ御座候、年来之渴望、漸時来り、生民之大幸ニ御座候、大谷良一、佐賀侯之命ニ而下り居申候、佐賀より小兒連越、種付帰候、君公若君ニ種付被_レ仰付_レ候由、佐賀ニ而始り候へハ、九州ハ直ニ広_レり可申候、此節之種方、始ハ舶来之牛痘種試ニ小兒兩三輩ニ種候處、漸々人々粒相發、其壺粒を以四人ニ種候處、四人尽ク發シ、四人より十三人、夫より逐々増し、明日又々四十人餘り種候、皆是迄尽ク發シ、種候而四日目ニ發し、八日目ニ膿汁ヲ取、直ニ他ノ小兒ニ移種、大抵二粒宛種へ、二粒宛發し、微熱有_レ之者もあり、無_レ之者も御座候、皆々遊候而相済申候

事実関係をおぎなえば、書簡の内容は以下のとおりである。佐賀藩では、弘化3(1846)年に天然痘が大流行する。佐賀藩医の牧春堂は、同年、『引痘新法全書』を板行する¹⁷⁾。清国の^{きゅうこうせん}邱 浩川がマカオにおいて牛痘接種法を伝授され、実際に牛痘接種に成功した経験をもとにし、

道元11(1831)年に『引痘略』を上梓する。それは、ジェンナーの『牛痘の原因および作用に関する研究』を中国語に要訳したものである。『引痘新法全書』は、邱浩川の『引痘略』を復刻したものである。翌弘化4(1847)年には、和歌山藩の小山肆成^{こやましせい}も同書を復刻板行する。

佐賀藩主鍋島直正(閑叟)は、江戸在府の佐賀藩医伊東玄朴の進言により、長崎在住の藩医植林宗建に牛痘苗をとりよせるよう命じる。嘉永元(1848)年6月、モーニケが牛痘苗をたずさえ、オランダ商館医としてオランダ領東インドの首都バタビアから長崎に来航する。それは、宗建がオランダ商館長レフィスゾーン(Joseph Henry Levyssohn)に要請していたものである。この牛痘苗による牛痘接種は失敗におわる。翌嘉永2(1849)年6月、あらたにバタビアから牛痘癰がとどけられ、モーニケは出島のオランダ商館で宗建や通詞の子どもに牛痘接種をこころみる。6月下旬であったといわれる¹⁸⁾。そのうちのひとりに一粒の赤い丘疹が生じる。丘疹はやがて水疱にかわり、中央がくぼむ。接種後8日目ごろには水疱が黄色に混濁し、膿疱になる。膿漿を4人の小児に植え付けたところ、4人ともに善感する。宗建からの知らせをうけた藩主直正の命により、「大谷良一」、すなわち藩医の大石良英が長崎に派遣され、実情を復命する。宗建は、直正の命をうけ、8月6日に牛痘接種をうけた小児をともない佐賀城下に到着する。8月8日、良英宅において、良英、島田南嶺、牧春堂といった藩医の子どもたちに牛痘接種がほどこされる。8月22日には、世子淳一郎、のちの直大^{なおひろ}にも牛痘が接種される¹⁹⁾。佐賀藩では、こうした痘苗により藩全域に牛痘接種が実施される。植林宗建がモーニケから伝授された牛痘接種法24項目と経験8例を詳述する『牛痘小考』をあらかわし、板行したのは嘉永2(1849)年10月である。

長崎では、老中阿部正弘の通達により、長崎奉行所の主管のもとで「市中一統」の小児を対象として牛痘接種が継続されることになる。実際、モーニケの要請により7月24日に江戸町のオランダ通詞会所に種痘所が開設される。出島の表門から橋をわたれば、すぐ江戸町である。江戸からも幕府医官もかけつけ、諸藩から駆けつけた医者とともに種痘所において牛痘接種法の講習をうける。

「牛痘」については周知の事柄であったのであろう、書簡では、あらためて説明されない。周弼と魯庵のあいだでは、しばしば牛痘接種法が話題になっていたことがうかがわれる。あるいは、周弼は、嘉永元(1848)年に長崎に牛痘苗がとどけられたことを聞知し、失敗したために、ふたたび牛痘苗がとどけられると予測していたのかもしれない。

周弼は、ただちに萩藩内でも牛痘接種を実施するよう洞庵に上申する。萩藩では、萩藩医学校の教諭役の洞庵が手元役に上申し、手元役が藩主慶親に裁可をおおぐという流れで政策が決定する。手元役は、当役、すなわち江戸留守居家老と当職、すなわち国元留守居家老のもとで関係事務を処理し、諸政策の立案にたずさわる。ただし、御側医の筆頭でもある洞庵は日常的に藩主に接する機会がおおく、事前に藩主から内諾をえていたとおもわれる。上申

は聴許され、周弼の弟研蔵が8月中旬に長崎へ派遣される。研蔵がえらばれたのは、研蔵が、佐賀藩において牛痘接種の中心的な役割をになう藩医の大石良英と伊東玄朴の象先堂の同門の間柄であったためである。良英は、文化12(1815)年ころにオランダ通詞本木昌造の次男に生まれたといわれる²⁰⁾が、昌造はシーボルト(Philipp Franz von Siebold)が鳴滝塾をひらいた文政7(1824)年の生まれであり、あきらかなあやまりである。佐賀支藩の白石鍋島家の侍医である大石家の養子にむかえられ、のちに江戸におもむき、伊東玄朴の象先堂に入門する。

研蔵が佐賀城下にたどりついたときには、良英は、日夜、牛痘接種にかかりきりになっていた。研蔵は、8月24日朝、ようやく良英に面会する。研蔵は、兄周弼につぎのように報告する²¹⁾。

(前欠)一件直様、大石良英江罷越聞合候処、此節種痘最中、良英も昼夜無_レ間隙_二侯由、漸廿四日朝面会、種取之儀、及_二相談_一候処、長崎奉行所より沙汰無_レ之内ニ、内密にて榊林宗建小兒へ種付、連帰りし御事ニ御座候故、他国へ伝播仕候而ハ如何敷候間、彼人相談之上ニて早速物筋聞合相成候趣、彼是と隙取候、今朝漸種渡しノ御許容相成、今晚、大石_と痘痂相渡候様ニ相成申候、此一件、良英不_二一形_一致_二心配_一呉候故、如此相運候事ニ御座候、則此度痂二三片大石_と送方相成候間、御試験可_レ被_レ下候、種法ハ天然痘同様、良英_とくはしく可_二申上_一候、膿汁差上度候へ共、種痘致居候小兒、来月朔日、膿汁取候時節ニ相当り申候、先此ノ度ハ、痘痂計手ニ入申候、私事も今ハツ半時、此元発足昼夜通しにて長崎へ参り、一日滞留、来月朔日ニハ此元へ帰り、種法等相授り可_レ申候、長崎ニも此節多人数引痘致居候、鍋島_と江府表江御掛合相成、御免迄ハ、牛痘種猥ニ取候事、不_二相成_一候、江府_と稟准之上、牛痘種法も御授ケ相成候と申噂ニ御座候、此趣故長崎にてハ結句種痘難_レ得奉_レ存候、彼地にてても是非得度とは奉_レ存候、先此元ニ而相調幸甚ノ至御座候、来月朔日、此元ニ而、膿汁及痂手ニ入り次第、昼夜通し□_二帰国_一、来月六七日頃ニハ到着可_レ仕候、此度、近在_と引痘ノ為メ連越候小兒四人、良英方江滞留、今日、第十一日と申す事、痘色形状等天然痘同様ニ御座候、大抵腕へ五ヶ所ツ、植付居候 ::::: 此通りニ御座候、モスト書名其外著述書之通植付候処□□相発し申候、佐加表、牛痘一件、御沙汰書、別紙ニ相写差上申候、此度之内命ハ甚以重任ニて案外ノ処、先々都合よろしく大安心仕居候、当表若殿様江も、一昨日、御植付被_二仰付_一候由也

この書簡からは、つぎのような事実を読みとることができる。第1は、研蔵、すなわち萩藩への牛痘苗の譲渡が許可されたという事実である。研蔵は、良英に面会し、牛痘苗の譲渡を要請する。榊林宗建は、長崎奉行所の許可を得ないまま出島で小兒に牛痘接種し、佐賀城下につれかえる。良英は、無断で入手した牛痘種を他藩に譲渡し、それが露頭したばあいの

事態を危惧する。鍋島家が幕府に折衝し、許可がでるまでは、牛痘種をみだりに譲渡することとはできないと謝絶する。良英は、研蔵の執拗な請願に屈し、当該部署に問いあわせる。翌 8 月 25 日の朝には牛痘種の譲渡が許可される。良英は、その晩には痘癩 2、3 片とくわしい説明書を萩の周弼のもとに送り、牛痘を接種した小児から膿汁をとることができる 9 月 1 日に膿汁を手交することを約束する。ただし、約束が実現したか否かあきらかではない。

第 2 に、研蔵は良英宅で牛痘接種の施術を観察する。研蔵が良英宅をおとずれたさいには、牛痘接種後 11 日目をむかえた小児 4 人が滞在していた。研蔵によれば、接種箇所の色合い、形状などが「天然痘」と同様であるだけでなく、植えつけ方法も「天然痘」と同様であるという。研蔵には、牛痘接種法は天然痘の予防のための有効な方法であるという認識はなかったであろうか。良英は、牛痘接種の技術的な解説書にも言及する。良英は、「モスト」、その他の蘭書を参考に、上腕に 5 ヶ所ずつ植えつけたところ、丘疹が生じたという。「モスト」とは、ドイツ人医学者モスト (Georg Friedrich Most) が 1834 年に出版した『内科学・外科学臨床総覧』(Encyklopädie des gesammten medizinischen und chirurgischen Praxis) である。同書は、オランダ語に翻訳され、『実地内科、外科及び産科の百科辞典』(Encyclopedisch woordenboek der practische genees-, heel- en verloskunde) という書名で 1835 年から 1839 年にかけて出版される²²⁾。長崎に舶載された蘭訳書の銃創篇が大槻俊斎によって訳述され、嘉永 7 (1854) 年に『銃創瑣言』と題し、板行されるが、蘭訳書は全訳されないまま『医事韻府』と呼ばれる。

この書簡には、8 月 24 日朝に良英に面会したのちの研蔵の行動予定がしるされる。研蔵は、翌 8 月 25 日の「ハツ半」、すなわち午後 3 時に佐賀城下をあとにし、長崎におもむく。9 月 1 日には佐賀城下にもどり、膿汁と痘癩を入手し次第、帰萩の途につき、9 月 6、7 日には帰着するというものである。佐賀城下から萩城下までの旅程は、昼夜を徹すれば、6、7 日ほどである。つぎの書簡は、周弼が江戸の萩藩政府にあてたものである²³⁾。

牛痘種之儀ニ付、養子研蔵長崎江被_レ差越_ル、過ル廿一日帰着、肥前佐賀表ニおゐて、御醫師大石良英相對所望仕候趣承候処、牛痘種ハ官物之儀ニ付、自己之了簡ニも難_レ及、内々御役向申入候処、御問柄之儀ニ付、十分御渡方被_レ致候様差図有_レ之、取計相成候次第ニ御座候、右ハ肥前守様御内聞ニも及候半之様ニも相聞へ申候、万一御挨拶被_レ仰付_ル候儀も可_レ有御座哉と奉_レ存候付、右之趣申出候間、宜御詮議 被_レ仰付_ル候様奉_レ存候事

この書簡によれば、長崎におもむいた研蔵は 9 月 21 日に萩に帰着する。佐賀城下を旅だったのは 9 月 15 日ころになる。このタイムラグから推測されるのは、研蔵がなんらかの事情により、佐賀城下を出立するのを 9 月 15 日に延引したか、萩に帰着したのちに、なんらかの事情により、ふたたび佐賀城下へおもむいたか、いずれかである。前者は、研蔵が痘癩や膿汁を約束どおりに入手できなかったばあいである。後者は、良英から送付された痘癩と研蔵が

持ち帰った膿汁による接種が失敗したばあいである。書簡の趣旨は、牛痘種譲渡の件については、佐賀藩主鍋島直大も内聞のことであり、藩として佐賀藩の格別の好意にたいし謝意をつたえる必要があるという点にある。

萩藩医学校では、萩城下での種痘の実施のための準備がすすめられるが、8月25日付の研蔵の書簡により、具体的な実施要領が策定される。9月9日、藩主慶親は、つぎのように内命をくだし²⁴⁾、9月11日に出府の途につく。

- 一牛痘一件、差掛り御用有_レ之節、御留守中之儀は、御当職所申出候様被_レ仰付_レ侯事
- 一引種取計之儀は、青木周弼父子、赤川玄悦、久坂玄機江被_レ仰付_レ、能美洞庵江申合候様被_レ仰付_レ侯事
- 一引痘場所之儀は、医学所被_レ仰付_レ侯事

藩主敬親が江戸桜田藩邸にたどりつくまでには、1ヶ月ほどかかる。種痘実施にさいしては、萩の留守政府の当職に全権をゆだねざるをえない。研蔵はすでに周弼の養子として届け出られていたのであろう、牛痘種の植えつけは、「青木周弼父子」、すなわち周弼、研蔵と、赤川玄悦、久坂玄機が担当し、洞庵の監督のもとで実施される。種痘所は、萩藩医学校、すなわち明倫館敷地内の好生館におく。

しかし、実際には牛痘種痘は、研蔵が9月21日に萩に帰着したのちに実施される。研蔵の帰還を待ちうけていた周弼は、同じく引痘方を命じられた赤川玄悦、久坂玄機などとともに、研蔵が小児に痘苗を植えつける施術にたちあう。

久坂玄機は、文化3(1806)年、良^{りょうてき}迪の長男として萩城下平安古^{ひやこ}の家に生まれる²⁵⁾。弘化3(1846)年8月、3年間の医学修業がゆるされ、京都にのぼる。翌4(1847)年6月には、緒方洪庵の適塾に入門し、すでにオランダ語を習得していたのであろう、嘉永元(1848)年3月には塾頭にあげられる。玄機は、宇田川玄真と坪井信道から周弼、洪庵などにつたえらえた宇田川・坪井の学統を継承する。玄機については、適塾在塾中、郷里佐賀からの帰途、立ち寄った伊東玄朴が玄機を象先堂の塾頭にむかえようとしたこと、玄機が藩命により「西洋砲術『ペロトン』」の翻譯に着手し、弘化3(1846)年11月に一部訳稿がなり、『演砲法律』と名づけたことが知られる²⁶⁾。『修訂防長回天史』第一編は、つぎのようにしるす²⁷⁾。

此年久坂玄機官遊して大阪に在り命を受けて蘭書ヘロトン銃陣書六冊中の二冊を譯す命じて演砲法律と曰ふ

玄機の弟である玄瑞は、安政6(1859)年7月から「亡兄所_レ著諸書」、すなわち「治痘局方及其他係牛痘諸譯書」、「亡兄曾譯」した「新撰海上大砲書及銃隊指揮令」などを閲読する²⁸⁾。「白鹿屯學校」も、そのひとつである。毎日のように、「文典」、すなわち『和蘭文典』前・後編を習読しながら、やがて「白鹿屯學校原書」を繙読する²⁹⁾。『洋学史事典』(雄松堂出版、昭和59年)の「白鹿屯学校図式」の項によれば、『白鹿屯学校図式』は『オランダ王立歩兵

小隊訓練所』(De peloton-school, voor de Koninklijke Nederlandsche infanterie) から「図を抜粋し、図解を附したもの」である。玄機が藩命により訳述した「蘭書ヘロトン」とは、『オランダ王立歩兵小隊訓練所』であり、玄瑞が繙読していた「白鹿屯学校」にほかならない。「毛利藩蘭学資料目録」³⁰⁾ は、「毛利藩に関係ある蘭書」のリストであるが、そのなかには“Exercitien en manoeuvres der infanterie, tweede Gedeelte, -Pelotenschool”の写本があげられる。

玄機の蘭学者としての名声はたかまるが、嘉永 2 (1849) 年正月、藩命により帰藩し、嫡子屋により萩藩医学校の都講役に任じられる。周弼は享和 3 (1803) 年生まれの 46 歳、玄悦は文化 5 (1808) 年生まれの 41 歳、玄機は文化 3 (1806) 年生まれの 43 歳である。

かれらは、経過を注意深く観察し、「唐西洋書籍中ニ相述候通、初発より収功迄、形色順序等少しも相違無」ことを確認する³¹⁾。天然痘の膿を接種した種痘部位に鮮明な痘疱が形成されれば、善感し、免疫が得られた証である。「唐」の書籍とは、『引痘論』のことであろう。『医宗金鑑』から種痘編を抜粋し、板行された『種痘心法』は、人痘接種法について論じたものである。かれらが参看した「西洋書籍」とは、ドイツ人医学者モストの『内科学・外科学臨床総覧』の蘭訳版である『実地内科、外科及び産科の百科辞典』、ドイツ人医学者フーフランド (Chrstoph Wilhelm Hufeland) の『内科ハンドブック——内科臨床の手引き』(Enchiridion medicum, oder Anleitung zur Medicinischen Praxis) などであろう。緒方洪庵は、安政 5 (1858) 年にコレラが大流行したさい、『虎狼痢治準』をあらわす。そのさい、『医事韻府』を参看する³²⁾。洪庵は、『モスト篤牛痘説』を訳述するが、それも『医事韻府』の一部を訳述したものであるといわれる³³⁾。

『内科ハンドブック』原著は、1836 年にプロイセンで刊行されるが、オランダ人内科医ハーヘマン (Herman Hendrik Hageman Jr.) によりオランダ語版に編集され (Enchiridion medicum, Handleiding tot de Geneeskunde Praktijk), 1838 年に刊行される³⁴⁾。洪庵は義弟の郁蔵とともに『内科ハンドブック』を訳述し、安政 5 (1858) 年から文久元 (1861) 年にかけて『扶氏経験遺訓』と題し、板行する。杉田成卿は、フーフランドの蘭訳書を重訳し、嘉永 2 (1849) 年に『治痘真訣』と題し、版行する。

多くのばあい、肉親や家族が被験者になるが、周弼の 2 児、すなわち次女照子と長男敏之介が被接種者になったといわれる³⁵⁾。いずれも善感したために、周弼は玄悦、玄機と連署し、「内演説」と題する 10 か条からなる種痘実施要領を萩藩の留守政府に提出する³⁶⁾。

此度、牛痘種、御取寄被_レ仰付_二候_一ニ付、於_二御當地_一追々植付相試申候所、唐西洋書籍中ニ相述候通、初発_レ収功迄形色順序等少しも相違無_二御座_一候、此趣ニ候へハ、最早種苗陸續植付相成可_レ申哉と奉_レ存候、右ニ付、左之通申出候間宜御沙汰可_レ被_レ下候
一牛痘之儀ハ、至而輕安別条無之者ニ而、厚き御主意筋之所、萩内行届候様、御内触

被_レ差出可_レ被_レ下_レ候、願出度有_レ之候ハ、私共三人迄申出候様被_二仰付_一可_レ被_レ下候事

一引痘之儀、於_二端々_一、私ニ引痘致候者有_レ之候哉ニ相聞候、是以仁術之一端御座候へハ、差留候儀ハ無_レ之候へ共、忝人沙汰と直段相定メ、餘分之謝儀を受け候趣ニも御座候哉と承及_レ申、第一御主意筋ニも不_二相叶_一、終ニ醫道之本意を失候様ニ相成、歎ケ敷事奉_レ存候、於_二醫學館_一經驗之上、在々之儀も、追而いか様共、被_二仰付_一可_レ被_レ下度、先其内ハ妄り之儀無_レ之様、向々御沙汰可_レ被_レ下候事

一醫學館、御貸渡之儀、兼而御沙汰御座候ニ付、来月二日より御仕向被_二仰付_一可_レ被_レ下候事

一引痘之儀ハ、多クハ小兒を相手致候事故、其場ニ臨ミ、涕泣致し、手術相施候事相成兼可_レ申候、其間、爲_二安撫_一菓子類、被_二差出_一可_レ被_レ下候、左候へハ、其煩無_レ之様相成可_レ申哉と奉_レ存候事

一引痘之儀ハ多人数ニ相成候而ハ、手数も掛り、私共三人ニ而ハ行届不_レ申、其上、醫學館根之御用事も有_レ之候儀ニ付、先達而申出候通、増人数被_二仰付可_レ被_レ下候事

一痘瘡中、食禁等忝人ツ、江申聞候様ニモ相成不_レ申、別紙之通、上木被_二仰付_一可_レ被_レ下候事

一引痘日ハ四日振と相定、出勤被_二仰付_一可_レ被_レ下候事

一引痘日、諸用之儀有_レ之候間、早朝より小遣兩人被_二差出_一可_レ被_レ下候事

一紙類入用之儀も御座候間、申出候ハ、被_二差出_一可_レ被_レ下候事

一引痘之儀ハ、種苗連綿不_レ絶様相成候儀肝要之事ニ御座候へハ、一同ニ多人数と申事ハ難_二相成_一候、引痘日、一日何人と相定め、切符を以取計、被_二仰付_一可_レ被_レ下候事

痘苗は劣化しやすい。種痘を継続的に実施しなければ、痘苗はたえてしまう。種痘の試行にかかわった藩医たちは、10か条からなる種痘実施要領を提示し、裁可をもとめる。第1に、すべての萩城下の人びとが牛痘接種をうけられるように、3人の引痘方に申し出るよう内触をだす。第2に、藩内でも私的に種痘をおこない、謝礼をもとめるものがあるが、それは「醫道之本意」にもとる行為であり、藩として禁止する。第3に、10月2日より好生館において牛痘接種を実施する。第4に、牛痘接種の対象になる小児が接種中に涕泣し、中断する可能性があるために、菓子などを用意する。第5に、3人の引痘方にも好生館における日常的な勤務があるために、牛痘接種にたずさわる人員を増員する。第6に、接種後、摂食などの制限があるが、それを周知徹底するためにパンフレットを作成する。第7に、牛痘接種は4日に1回実施する。第8に、牛痘接種日には、早朝から雑用にたずさわる小遣いをふたり勤務させる。第9に、必要な紙類を用意する。第10に、牛痘接種は種苗をたやさないように連綿とつづけなければならないが、牛痘接種日に多人数に接種することは困難であるために、切

符制を採用する。

引痘方の要望にたいしては、「申出之通沙汰可_レ被_二仰付_一候」、「申出之通可_レ致其沙汰候」といった回答がよせられる。10月5日には、引痘方の3人が「引痘掛」に、あらたに赤川玄成、竹田庸伯、烏田良岱、松村太伸などの7人が「臨時引痘掛」に任命され、10月9日から種痘接種を実施する。竹田庸伯は、文化8(1811)年、萩藩医松島正悦の次男に生まれ、天保6(1835)年、萩藩医の竹田本家から分知をうけ、一家をたてる³⁷⁾。天保8(1837)年11月に大坂の高良斎のもとで修業する。良斎は、文政7(1824)年に鳴滝塾がひらかれたときシーボルト門下にはいり、文政11(1828)年にシーボルト事件がおこるまで門生として研鑽する。「吉雄塾にて数年の間和蘭語及びその醫方をも研究したることとて、同窓生に比して造詣の優る所ありし」ために、鳴滝塾の都講にもあげられた蘭学者である³⁸⁾。高良斎のもとでオランダ語を習得した庸伯は、天保15(1844)年に萩藩医学校の翻訳掛周弼の補佐を命じられる。烏田良岱は、文化元(1804)年、萩藩一門家老毛利蔵主の家臣山根意休の四男に生まれ、天保年間に萩藩医家の名門である烏田家の養子にむかえられる³⁹⁾。はやくから西洋医学をころごし、佐藤泰然、高野長英に師事したといわれる。萩藩医学校の開設時には医学掛に任じられ、「外科必読」の会読を担当する。

引痘掛は、「後來も引痘相免れ候段、自然無_レ疑事」と医学所における牛痘接種に自信をふかめる。種痘の実施は「生民 御救之一御大美事」であり、「醫家之本意ニも相叶申候事」である。引痘掛は、「此上ハ何卒御国中一統御廣メ被_二仰付_一度奉願候」と萩城下だけでなく、藩内全域で種痘を実施するよう藩政府に上申する⁴⁰⁾。

引痘掛は、藩内全域での種痘の実施は「大造之御事」であり、ただちに裁可されるとは考えていなかった。ところが、阿武郡須佐村や萩近郊に「悪痘」が流行しはじめる。引痘掛としては「救幼之役、乍_レ承_リ仁人之危急_ヲ、傍觀罷_リ過_シ候儀、難_キ忍_ビ次第」である。「いかにも早く未然を防ぎ候事、引痘之本意ニ御座候」として、藩内全域での種痘の実施について「格別之御詮議」を願いでる⁴¹⁾。伺はただちに裁可され、藩の全域に種痘が実施されることになる。

地方執政手元役兎玉三左衛門と唐船方三宅忠左衛門は、引痘掛の上申にもとづき、10月24日付で江戸方執政手元役仁保弥右衛門につぎのように提案する⁴²⁾。

(前略)牛痘引種之儀、肥前紀州等ニ而は、著述之書籍開板相成候由ニ付、於_二此御方_一も西洋書翻訳被_二仰付_一、一書上木被_二仰付_一候ハ、諸人之益ニも可_レ相成_二歟、於_二其元_一は官刻も出来可_レ仕候付、手後れニ不_レ相成_二様、開板被_二仰付_一候而はいか、可_レ有御座哉、玄機研蔵太仲杯ハもはや内々ニハ牛痘書翻訳仕置候様ニも相聞申候(後略)

全藩規模で種痘を実施するとすれば、藩医だけでは対応できない。諸藩のなかには、牛痘接種実施マニュアルを作成し、板行する藩もある。幕府も開板する。書簡の趣旨は、萩藩と

しても、後塵を拝することがないように「西洋書」を翻譯・板行してはいかがか、というものである。このころには、久坂玄機だけでなく、松村太伸や青木研蔵も「牛痘書」を翻譯していた。

萩藩留守政府は、嘉永3(1850)年正月13日付で各宰判の代官に具体的な実施要領を通達する⁴³⁾。

此度、於萩、牛痘引種被仰付候付、諸郡在、迄行届候様可被仰付との御事ニ付、左之通被仰付候事

一 宰判中陪臣地下醫之内、巧者之者両三人宛、掛り被仰付候条、萩表罷出、於醫學館傳授之上、種苗之儀は在方より小兒連出被仰付、引種感し候儀相極候上、連帰、其種を以種付被仰付候事

但醫師之儀は御代官所且給主と付、人柄撰挙之上、掛りニ被仰付候条、右懸り之外、引種取扱之儀、堅被差留候事

付り才判ニより懸り醫師之儀、増人数をも可被仰付候事

一 諸才判給領共ニ引種之儀、切符詰ニ被仰付候条、醫學館と切符惣高二而、御代官所江受取、掛り之醫師江相渡、戻入り切符之儀も、御代官所江取纏、醫學館江追而差返候様被仰付候事

但切符相渡候名前付記、引種姓名年齢種點之數及び不感再種其外異症出来候ハ、

委細付記、一ヶ月切御代官所江面着差出、夫と醫學館江差出候様被仰付候事

一 引種相頼候向々と醫師江之謝礼其外、會积ケ間敷儀、堅被差留候事

この実施要領は、引痘掛の原案にもとづき、萩城下だけでなく、藩の全域を対象とし、しかもあらゆる身分のもののあいだに種痘を実施するために作成されたものである。第1に、藩の全域に種痘が行き渡るためには、民間医を動員しなければならない。各宰判や給地から地下医や陪臣の医者の中から熟達したものを2、3名ずつ選抜し、いわゆる種痘医として萩の好生館において伝習をうけさせる。医者を選抜するのは、萩藩領のばあいには代官、福原家などの知行地のばあいには領主である。当時、三田尻の蘭方医梅田幽齋などのように、民間で種痘をおこなうものがいたが、種痘医以外のものには「引種取扱之儀」は嚴禁とされる。

第2に、伝習にさいしては、種痘医は小兒を随伴しなければならない。その子に種痘をほどこし、善感したことを確認したうえで、連れ帰り、他の小兒に種付けしなければならない。当時、種痘は人から人へ種継ぎするほかに確実な方法はなかった。

第3に、種痘が藩内にもれなく浸透するために、「切符」制度を採用する。好生館が発行する切符が代官所を介し、種痘医に下付される。種痘医は、切符に種痘をうけたものの姓名、年齢、「種點之數」、「不感再種」を記し、「異症」が生じたばあいには委細を付記しなければ

ならない。切符は代官所から好生館にもどされ、種痘の実施状況が把握される。種痘医への謝礼などは厳禁である。

代官や領主は、ただちに医者を選抜をはじめ、嘉永3(1850)年2月以降、種痘医として当職所に登録する。種痘は萩藩内の各宰判において実施される。萩藩の支藩である長府藩領宇賀村の地下医古谷道庵は、日記の嘉永3(1850)年3月20日の条につぎのようにしるす⁴⁴⁾。

山崎玄材種痘事曰ク萩府公令ス、防長二国小兒種痘故各村医人皆府中至り青木周助受術ヲ受シテ後之施ス(中略)種痘果何益之有是皆周助出ス蘭説怪ベシ

道庵は地下医とはいえ、江戸の坪井信道に師事した経歴もあり、周弼と同門である。道庵のように、牛痘接種に疑念をいだくものも少なくなかったであろう。しかし、種痘は、万延元(1860)年末までの11年間に20万人あまりに実施され、人口は漸増する⁴⁵⁾。

Ⅲ. 医学所規則

牛痘接種が全藩規模に拡大され、藩民は「非命之災」からののがれることができるようになる。その中心的な役割をになった周弼は、すでに萩藩医学校の運営にかかわっていた。牛痘接種が拡大されるなかで、好生館が竣工する。

嘉永3(1850)年8月11日、藩主慶親が橋本川をさかのぼり、好生館の開館式に來臨する。同月13日、藩主慶親の命により、家老毛利能登、すなわち一門厚狭毛利家当主の元美が好生館にでむき、列座する藩医に新館造築の意図を述べ、あたらしい好生館への要望をつたえる⁴⁶⁾。

今般厚き

思召を以、南苑御囲内江醫學所新規ニ御造建被_レ仰付_ニ、好生館と唱被_レ仰付_ニ侯、於_ニ御主意_ニハ御醫師中業筋成立、醫風令_ニ興隆_ニ侯様ニとの御事侯、醫術は濟世救民之要務侯処、近來一統弊風に押移り、醫道之本意を失ひ、學術未熟之者も猥に令_ニ執_ニヒ_ニ、動すれハ輕病も異病と相成侯、甚以不_レ謂事侯、因_ニ茲_ニ、學術為_ニ研究會業_ニ修行被_レ仰付_ニ侯条、御醫師中在役非役とも怠らす罷出、可_レ有_ニ出精_ニ侯、尤老少之無_ニ差別_ニ事ハ勿論侯、醫道之盛衰ハ士民之人命に相拘事ニ付、深く被_レ遊_ニ御煩念_ニ、萬民御生育之ため被_ニ思召_ニ、誠以難_レ有御事侯条、此旨能々相心得、終身無_ニ怠惰_ニ、令_ニ修行_ニ醫道_ニ成立

御主意筋に相協侯様心懸肝要之事侯、若不心得之者ハ被_レ及_ニ御沙汰_ニ儀も可_レ有_ニ之_ニ候、此段申聞侯様ニとの御事

萩八丁南苑に医学校を新築し、好生館と名づけたのは、藩医のあいだに医業を「成立」させ、「醫風」を「興隆」させるためである。「好生」は、『書經』^{だい いう ぼ}大禹謨の「好_レ生之徳洽_ニ于民心_ニ、茲用不_レ犯_ニ于有司_ニ」、すなわち「生命をいつくしむ徳は人心に広くしみこみ、そこで官吏に逆らうことはない」という一節⁴⁷⁾にちなむ。賀屋恭安は、天保13(1842)年10月に長

逝するが、萩藩医学校の開設にさいし、米沢藩の好生堂、佐賀藩の好生館などについても調査していた。恭安の調査は、校名にも反映されたのであろう。

「醫術」は、「濟世救民之要務」、すなわち「世を濟^{すく}」い（『莊子』庚桑楚篇）、藩領民を救うために欠かせないが、近来、医業は弊風におちいり、本意をうしなっている。医術に未熟なものが診療にたずさわり、病を悪化させるような事態もみられる。そこで、藩主慶親はすべての藩医に医書会読に参加し、医術の研究・修業にはげむよう命じる。それは、「醫道之盛衰」は藩士をふくめた藩民の生命にかかわるからである。山口県文書館には、萩藩の草創期の医療行政に関する文書「医業成立沙汰控」が所蔵される。「成立」という語句には、藩医学校を臨床という点で有効な医学の研究・学習の場に再編成し、いわゆる専門職としての臨床医を輩出させる、という意味合いがある。

医書の会読は、天保11(1840)年にはじまっていたが、仮住まいがつづき、当初の計画どおり、萩藩医学校が専用の、しかも新築の校舎をもつのははじめてである。洞庵は、藩主慶親の意向にそい、要望にこたえなければならない。

嘉永3(1850)年8月の好生館の始業式にさきだち、慶親は洞庵に「醫學修業規則」を起草させ、公布させる⁴⁸⁾。「醫學修業規則」とは、萩藩医学校でははじめての規則書ともいうべき「覺」と「醫學諸流稽古之式」のことである。「覺」はつぎのとおりである⁴⁹⁾。

一醫道ハ司命濟世ノ重職ニ侯得ハ、公平正大ノ心掛を以國家

御仁政之

御主意を失ハす、御好生之一端を補助いたし侯儀、可_レ爲_二肝要_一侯事

一學術之儀ハ実学実験を旨とし、空論鑿說ニ拘泥すへからず侯事

一藥制處方之儀ハ古人之方論ニ本つき可_レ申、自己之臆断を以、軽く人命ニ試ミ申間敷侯事

一ヒ之妄投一味之諧置も生死ニ係り侯事ニ侯得ハ、謹慎精密之心掛肝要侯事

一課業之式ハ科目之通順次可_レ被_二相学_一侯、専らに一家を主張し、虚傲偏執有_レ之間敷侯事

一讀書之儀ハ博采通讀を旨とし、古今を不_レ論、和方洋書とも悉皆可_レ致_二讀誦_一侯、方法ハ純粹簡要ニして、日用事实的切之處ニ着眼注意肝要侯事

一十七八歳迄ハ專一二儒学研究いたすべく侯、彝倫ニ明にして、義理に通曉するハ、醫を学ふの基礎なり、尤詞藻に耽り、本職を忘却不_レ致侯様可_レ被_二心掛_一侯事

右之通被_二仰付_一侯条、此旨無_二違背_一、宜被_二相守_一侯以上

嘉永三戌八月

「覺」は、藩主慶親の要望にたいする返答でもある。まず、医業は「司命濟世ノ重職」であるという大前提がしめされる。「司命」は、もともと「文昌宮六星の第四星」を意味し、「北

極星の傍にあり人間の寿命をつかさどるとされている」が、転じて「生殺の権を握るもの」（『日本国語大辞典』）を意味する。貝原益軒は、医術について「萬民の生死をつかさどる術なれば、醫を民の司命と云、きはめて大事の職分なり」と述べている⁵⁰⁾。医術は人命に直結する。あらためて医師の使命感を強調しなければならないほどに、萩藩医のあいだにも「醫道之本意」にもとる「弊風」がおおいつくしているという認識が藩主にもつたえられていた。

つぎに、藩医のあいだにはびこる「弊風」をただし、「醫道之本意」にたちからせるための方策をしめす。それは、同時に重責をになう医師の養成・再教育の方針でもある。第1に、医術は「學術」にもとづき、あくまでも臨床応用をめざさなければならない。「空論」や「鑿説」にまどわされてはならない。薬剤処方、憶断はゆるされず、つねに古くから伝えられる本草書に依拠しなければならない。第2は、医術修業にさいしての心得である。授業にさいしては、特定の流派に固執し、驕慢な態度や偏執的な姿勢をとってはならない。

第3に、臨床応用をめざすために、「古今を不_レ論、和方洋書とも悉皆可_レ致_二讀誦_一侯」として、「和方」と「洋書」を涉獵するようながす。「洋書」は、オランダ語でしるされた医薬書や関連する原書を意味する。「和方」は「漢方、洋方」に対する概念であり、「我が國在來ノ醫方」を意味する（『新編大言海』）。しかし、近世社会につたえられた「我が國在來ノ醫方」は、漢方、すなわち「醫術ノ、支那ヨリ傳ヘタルモノ」（『新編大言海』）にはかならない。「和方」は、なにをさすのであろうか。

「我邦ニ於ケル李朱醫學派ノ祖」である田代三喜^{さんき}⁵¹⁾は、明にわたり、李東垣^{りとうえん}（李杲^{しやう}）、朱丹溪^{たんけい}（朱震亨）に師事し、長享元（1487）年に帰国する。東遊中の曲直瀬正盛^{まなせしやうせい どうさん}（道三）が三喜に師事し、京都にもどり、李朱医学を講じる。道三により、のちに後世方と呼ばれる医家の一流派が形成される。後世方が依拠したのが中国最古の医学書といわれる『黄帝内経』^{こうていだいけい}である。『黄帝内経』の原伝本は、『素問』と『靈樞』^{れいすう}のふたつの書からなり、前漢末から後漢はじめにかけて整理編纂される。『素問』は、「生理、病因、病理などの基礎医学に相当するものと、摂生、養生法など」を論じたものである。『靈樞』は、「解剖、生理、特に中国医学独自の経絡思想と、その物理療法（鍼、灸、按摩、刺絡、熨法等）」について論じたものである⁵²⁾。

後世方医学は、陰陽五行説や運氣論などとの結びつきがたつよいために空理空論にながれる傾向がある。17世紀になると、後藤艮山^{こんざん}が「宋・明醫流ノ空論ヲ排シ、専ラ内經及ビ傷寒論ヲ師宗トシ、實詣ニヨリテ、自ラ一家ノ言ヲ立テ」⁵³⁾、後世方医学に批判的な立場をとる古医方^{こいほう}が台頭する。古医方は、後漢末の張仲景の『傷寒論』^{しやうかんろん}を聖典視する。張仲景は、後漢末期から三国時代にかけて、『傷寒論』と『金匱要略』^{きんきやうりやく}といった薬物治療書を編纂したといわれる。いずれも、中国医学の薬物治療を論じた最高で最古の古典である⁵⁴⁾。『傷寒論』は、後漢に成立したといわれ、「治療の指針となるべき病症とその変化を経験的な立場から分類し、

それぞれの症例と変化に応ずる薬方を記載したもの」である⁵⁵⁾。内容が抽象的であるために、中国はもとより、日本でもさかんに研究され、江戸期だけでも400種におよぶ研究書が生みだされる⁵⁶⁾。

江戸期には、後世方、古医方のほかに、幕府医官の多紀家「古方・後世方の長所を折衷した」折衷派、山脇東洋、華岡清洲、小石元瑞などのように「蘭の長を採り入れた」漢蘭折衷派が生まれる⁵⁷⁾。こうした流派は、みずから依拠する中国医書に関する多数の研究書を生みだす。それは、同時に中国から伝来した医学が日本化される過程であり、日本化された中国医学は皇漢医学とも呼ばれる。それぞれの流派が奉じる中国医書、それらに関する研究書は、訓点を付されたり、漢文体、すなわち「漢文訓読の口調にならった文体」（『広辞苑』第6版）であらわされる。こうした中国医書や研究書が「和方」と総称されたのではないであろうか。

第4に、17、8歳までの青年期に「儒学」をまなぶようもとめる。それは、「彝倫」、すなわち「人ノ、常ニ守ルベキ道」（『新編大言海』）をまなばせ、「義理」をわきまえさせるためである。和歌山藩医学館の「規條」には、つぎのようにしるされる⁵⁸⁾。

學醫者當先修四書六經、以明聖人之道也、不明聖人之道、而暗孝弟忠信彝倫常行之道、雖吾醫經不能探其蘊奧也、然此等書在學習館日々講讀、則在此館不設其局、宜就彼而學焉

「六經」は、儒学の根幹となる『詩經』、『書經』、『易經』、『春秋』、『礼記』、『樂經』の六種の經書である。『樂經』は秦の焚書により絶滅したといわれ、そのかわりに『周礼』^{がつけい}がくわえられることがある。医術をまなぶものは、まず四書六經をおさめ、聖人の道をあきらかにしなければならない。聖人の道をあきらかにすることができなければ、孝弟、忠信、彝倫、常行の道にくらく、医經の蘊奧をきわめることができない。「儒学」は人倫をわきまえさせるための道德論であり、漢方医学の基礎となる「漢学」ではない。

「醫學諸流稽古之式」は、つぎのとおりである⁵⁹⁾。

一醫書講釈、例月三日宛之事

一經方、西洋譯書、本艸科、外科會讀、例月三日宛之事

一醫經、西洋原書、産科、鍼科會讀、例月二日宛之事

一方案例月晦日、尤小ノ月は止たるへき事

右講釈ハ朝五ツ半時始_レ之、會讀ハ四時_ニ八時終_レ之、尤定日之外、前後問合を以、内會相増侯儀ハ勝手次才たるへき事

一素讀之儀、日々八時_ニ七時迄たるへき事

一毎歳稽古始正月十三日、稽古終十二月十五日たるへき事

但例月六日宛、五節句、七月ハ十三日_ニ十六日迄、春秋春日社祭禮當日、其外□有節ハ可_レ為_二稽古止_一事

一醫術之儀ハ人命を救ひ、生民繁栄之根源ニ侯得ハ、名利名聞を離れ、公正誠実之心得可_レ為_二肝要_一事

一少年之内ハ、専ら儒学ニ志し、成立之上、醫業相学、四十歳ニ至り侯迄ハ、別而可相勵事專要ニ侯、尤終身可令修行業筋ニ侯得ハ、老少之無_二差別_一事ハ勿論たるべき事
但公用ハ格別可_レ成程ハ世用繰合せ無_二懈怠_一様ニ可_二心掛_一、在役之面々たりとも御用無_レ之節は可_レ有_二出席_一侯事

一多人数集會之宴侯間、禮義正敷、喧嘩口論、又ハ雜語等無_レ之様、能々被_レ相_二心得_一、
仮初ニも持方ケ間敷儀、可_レ有_二用捨_一侯事

一學風其外引立之儀、教諭役江御任せ之儀ニ付、其身之爵禄を不_レ論、万端可_レ請_二指圖_一侯、若教諭役病氣障等之節ハ、都講舎長等申合可_レ有_二稽古_一侯事

一好生館之儀、明倫館江附属被_二仰付_一、惣奉行江諸沙汰被_二仰付_一侯事
右條々、宜相守旨、依_レ仰如_レ件

嘉永三庚戌八月日欠

前半部分では、授業日程、時間などが提示される。「和方」として括られた中国医書、すなわち「経方」や「醫經」も講釈や会読のためにもちいられる。「経方」と「醫經」については後述する。講釈は毎月3日、「朝五ツ半時」にはじまる。経方、西洋訳書、本草科、外科の会読は毎月3日、医經、西洋原書、産科、鍼科の会読は毎月2日。会読は「四時」にはじめ、「八時」におわる。定日のほかに、内輪で会読をおこなうこともできる。素読は、毎日、「八時」から「七時」までである。毎年、正月13日に始業し、12月15日に終業する。ただし、毎月、6日、五節句、お盆の7月13日から16日、春秋の春日社祭礼当日、そのほかにも休業日がある。

萩藩医学校では、毎月末が「方案」の日になる。ただし、「小ノ月」、すなわち天保暦で1カ月の日数29日以下の月には休止する。小の月と大の月は、それぞれ6月ずつある。「方案」は「方法ニ就キテノ工夫」（『新編大言海』）を意味する。医学に関していえば、「医案」にあたる。「医案」は、「治療の方法についての工夫」、「診察カルテ」というふたつの意味がある⁶⁰⁾。多紀家が主宰する幕府医学館では、寛政3(1791)年以降、毎年春秋に本科、小児科、外科、口科の4科について医学考試が実施される。考試の目的は、「世襲による医術の低下や権力集中を是正し、官医を能力に応じて昇格させる」ところにある。受験生には、「臨床における診断・治療の能力を試す」ために「医案方付留記」も課される。それは、医学館の患者のなかで、作成した医案にしたがい処方決定し、完治したものの症例をえらび、受験者にこの症例を提示し、医案と処方を筆録させる、というものである⁶¹⁾。江戸時代の医者は、明の『名医類案』にならい、「医案」を作成していた。

周弼の旧師坪井信道は、毎月の定日、おそらく3と8の日、すなわち3、8、13、18、23、

28日に「臨床・病理総合討議会」あるいは「病床側授業」ともいうべき臨床授業をおこなう⁶²⁾。それは、上級の塾生に「医按」を作成・提出させ、それに甲・乙・丙の評点を付し、返却するというものである。「医按」とは、特定の患者の性別、年齢、症例、病名、原因、予後、治法、摂生について塾生が自分の知識と文献にもとづき書きしるすものである。「医按」を作成させるために、あらかじめ、みずから著述した『診候大概』をテキストとして、脈拍を数え、体温を測定し、患者の病状、診断、予後などについて討議させていたとおもわれる。信道は、青年期に漢方医学をまなぶが、その過程において「医案」を作成し、西洋医に転じたのちには、独自の「医按」をつくりだしたのであろう。萩藩医学校の「方案」は、西洋医学については、信道が創出した、臨床的な性格をおびた「医按」を継承したとおもわれる。

後半は、医術の修業心得といった内容である。第1に、医業は人命をすくい、生民の繁栄につながる職業であるために、名聞や利欲からはなれ、公正誠実を心掛けることが肝要である。第2に、青少年期に儒学をまなんだうえで医術をまなび、不惑の年齢に達するまでは精進しなければならない。第3に、医学校での授業には多くの医生が参集するが、礼儀たしくふるまい、喧嘩、口論、私語などをつつしまなければならない。第4に、学風、その他については教諭役に一任し、地位や俸禄にかかわりなく教諭役の指図にしたがわなければならない。この条項は、地位がひくく、俸禄がすくない藩医が萩藩医学校を統括する教諭役に就任する場合を想定するものである。いずれ周弼に教諭役をゆだねようという洞庵の意嚮がうかがわれる。教諭役が病気や差し障りがあるばあいには、都講、舎長と相談したうえで、稽古しなければならない。第5に、好生館は明倫館の管轄下にあるために、諸事、明倫館総奉行に指示をあおがなければならない。

「覺」は、萩藩医学校の理念と基本的な方針をしめしたものである。「醫學諸流稽古之式」は、前半では授業日程、時間などを提示する。それは、萩藩医学校において実際に採用されているものを整理し、成文化したにすぎない。後半は、医術の修業心得といった内容である。洞庵は、周弼を藩医に推挙したさいには、萩藩に西洋医学を普及浸透させるために、周弼に萩藩医学校を西洋医学校に再編する役割をゆだねようという心づもりであった。萩藩医学校の理念と基本的な方針をしめし、会読科目のなかに「西洋譯書」や「西洋原書」を設定したとしても、西洋医養成のための課程とはほどとおい。

洞庵は、周弼にとりわけ学科課程を明示した規則案の起草をゆだねる。周弼が起草した「医学所規則」案はつぎのとおりである⁶³⁾。

今般、醫學所御創業ニ付、御醫師中ハ不_レ及_レ申、御國中陪臣地下醫迄も、依頼入學被_レ仰付_二侯事_一ニ候へハ、日夜勉勵國家御博愛之御盛意ニ對揚仕侯様、心懸肝要之事ニ候、醫業之儀ハ、人命天壽ニも所關して、無_レ此上_二重職_一ニ候へハ、篤學謹慎ハ勿論たるべく候、今日之讀書ハ明日忽チ事實ニ相試侯事付、章句ニ拘泥し、空論を主張いたし侯事、

有_レ之間敷侯、博采通覽して簡要に歸し侯様致度侯、偏執固守ハ事實ニ融通相成かたく侯

我朝ハ制度漢土ニ倣侯事ニテ、文學藝術も悉ク彼ニ取りて我用とす、醫術ニ至り而も、軒岐之道、久敷世ニ傳り侯寸法、亦彼を以模範といたし來り侯、猶亦、近來西洋學専ら世ニ行レ、議論寸法も別ニ一道を開らき、漢人未發之理を究メ、治療上ニ裨益有_レ之侯様相見侯、學校之儀ハ容衆之

御主意筋ニ侯へハ、漢學を基礎として、洋學をも御取用 被_レ仰付_レ侯、漢洋兼學之徒を上等とす、然所、人才ニハ長短も有_レ之事故、一概ニ難_レ被_レ仰付_レ侯、各々所好ニ從事して、濟世利用之標的ニ相叶侯様肝要之事侯、漢洋科目左之通被_レ仰付_レ侯

漢學科目

醫經

血脈、臟腑、陰陽、表裏、五運、六氣、百病之起原、死生之分を論侯科目也、素問、靈樞、此科目之主書とす、素より牽強附會之說多ク、事實ニ無_レ益事ニ有_レ之侯へ共、諸他之醫書ハ、是も資始として擴張したる事にて、且ハ千古不易之金言も多ク侯へハ、初學之徒ハ一先、此科目を研究して其大略を會得すへし

經方

草石之塞溫ニ本き、疾病之淺深を量り、其失常をして平復せしむる事を論侯科目也、於_レ此科目_ハ傷寒論を以主書とす、傷寒論ハ寸法之鼻祖にして、醫門之金科玉條とすへき書ニ侯へハ、注意精研可_レ致侯、其餘唐宋以下清朝迄之諸書、并我朝先輩之著書、皆悉此科目ニ附屬侯事ニ付、究力通覽すへし、此諸書ニ就而ハ病因病證治方別而辨明して、事實上ニ實徵致侯様肝要之事ニ侯

洋學科目

譯書

西洋書、於_レ我朝_ニ翻譯を経たる書を以學ふの科目也、第一ニ人身窮理附解剖書、第二ニ原病書、第三ニ病論治法、第四ニ藥劑書附舍密學、此順序ニ從テ研究いたし侯へハ、洋醫道之大義を會得すへし

原書

洋書之原文ニ就テ學ふの科目也、初學ハ譯司同様之心得ニして、義理よりハ先ツ文法を本として學ふへし、語辭暗記文法明辨ニ侯へハ、自然ニ洋書之意義ニ貫通可相成侯、洋學文範之熟讀暗誦之上ハ、醫書ニ限らず、窮理書、天文地理書ニても誦讀すへく、千理融通之上ハ專一ニ醫書を熟讀して、事實上之標的と可_レ致し

諸科之儀ハ内科之支派ニ而、右之書中ニ散見致居侯へ共、別段手術等も有_レ之事故、純一ニ研究不_レ致侯而ハ、其奧義ニ至りかたく侯、左之通、専門諸科被_レ定置_レ侯

専門諸科

本草科 産科 鍼治科 眼科 外科

右之内、鍼治科、眼科、外科之儀ハ、家筋有_レ之事ニ付、其本職研究之上、他科を相學
侯様被_レ仰付_レ候事

周弼は、前文において基本方針を提示する。まず「人命天壽」にかかわる「重職」である「醫業」の振興策について論じる。第1に、周弼は、世襲制のなかで安住する藩医の医療技術の停滞と倫理の低下という弊風をのぞき、医学教育に新風を吹き込むために、萩藩領の防長2カ国の陪臣医や地下医にも、萩藩医学校の門戸を開放する必要がある、と指摘する。貝原益軒は、世襲制について、つぎのように述べ⁶⁴⁾、「才」がないものが医業にたずさわることをいさめる。

醫は三世をよしとする事、禮記に見えたり、(中略)三世とハ父子孫にかかわらす、師弟子、相傳へて三世なれば、其業くわし(中略)もし其才なくバ、醫の子なりとも、醫とすべからず

第2に、周弼は、洞庵の「覺」では「和方」として括られた中国医書を「軒岐之道」として復活し、「漢洋兼學」という基本方針を提示するが、「漢人未發之理」をきわめた「西洋學」、すなわち西洋医学を奨揚する。「軒岐之道」とは、中国医学の祖といわれる黄帝(軒轅)と岐伯の学問であり、『黄帝内経素問』と『黄帝内経靈樞』に依拠する中国医学を意味する。周弼が中国医学を「軒岐之道」としてよみがえらせたのは、日本が、文学や芸術だけでなく、医術についても中国を範としてきた伝統をたちきような急進的な変革を回避しようとしたからである。周弼は「人才ニハ長短も有_レ之事故」、すなわち西洋医学の適性がない医生もいるとして、あくまでも古代以来の伝統的な「漢學」、すなわち漢方医学を基礎とし、「漢人未發之理」をきわめた西洋医学をとりいれなければならないと結論づける。

周弼は、オランダ語を介してつたえられる医学を「西洋學」、すなわち西洋医学と呼ぶ。オランダ医学は、「当代全ヨーロッパの師表」として崇敬されるブールハーフェ(Herman Boerhaave)が画期的な臨床医学を講じたことにより、ライデン大学が「西洋医学のメッカ」となった18世紀前半に絶頂期をむかえる⁶⁵⁾。しかし、その後はオランダでも、フランス、イギリス、ドイツの医書の蘭訳書が流布する。オランダ語の医薬書を訳述したり、繙読したりした経験がある蘭学者は、原著から蘭訳されたものが多いことを把握し、「蘭方」ではなく、西洋医学と呼ぶ。周弼の訳述書のひとつである『袖珍内外方叢』も、ドイツ人内科医ブラッゲ(Martin Wilhelm Plagge)が著したものである。

まず、周弼が西洋医学を奨揚するのは、近来、西洋医学が一大潮流になっただけでなく、西洋医学が「漢人未發之理」、すなわち漢方医学にはみられない臨床的に有効な療法を提供するからである。それは、牛痘接種の全藩実施により実証されている。つぎに、周弼が漢方

医学を忌避する理由は、規則案の端々からうかがわれる。

ひとつは、「章句ニ拘泥し、空論を主張いたし候事、有_レ之間敷候」という文言に端的にみてとれる。

江戸期には、後世方、古医方、折衷派といった漢方医学の流派が生まれる。後世方は、前漢末から後漢はじめにかけて整理編纂された『黄帝内経』に依拠する。古医方は、後漢末の張仲景の『傷寒論』を聖典視する。こうした流派は、みずから依拠する中国医書に関する多数の研究書を生みだす。江戸期には、『傷寒論』だけでも400種におよぶ研究書が生みだされる。それは、章句にこだわり、字句の穿鑿に専念した結果である。同時に、聖人の言説の釈義に没頭するあまり、経験主義的な薬物学の域を脱することができない。

江戸中期以降にあらわれた「蘭方医」と呼ばれる医者は、漢方医学をまなんだのちに、西洋医学に転じる。西洋医学の潮流をつくりだしたひとりの杉田玄白は、西洋医学に転じた理由について、つぎのように述べている⁶⁶⁾。

素_{しや}霊_{しよく}に社_し稷_{よく}し、仲_し景_{よく}・思_し邈_{よく}・王_し燾_{よく}等の書に本づきて、説を立て論をなし一家をなすと称するも、皆これ憶度附会して、人々その好むところに阿_{おもね}り、我意を以て事を決すれば、正_{せい}鵠_{こく}となすに足らず。語に云く、その本乱れて末治まるものなしと。あに然らずや。これ予の支那の書_{ゆえん}を廃して、ひとり和蘭の書を取る所以なり。

「素_{しや}霊_{しよく}」とは、『黄帝内経素問』と『黄帝内経靈樞』のことである。後世方は『素問』と『靈樞』を神のごとくあがめ、古医方は『傷寒論』と『金匱要略』にもとづき、それぞれに流派を形成する。しかし、それらはみな推量によりこじつけ、好みにより推断するために要所を誤る。「其本乱而未治者否矣」⁶⁷⁾といわれるように、「その根本〔のわが身をよく修めること〕がでたらめでありながら、末端〔の国や天下〕がよく治まっているというのは、めったにない」。それが、玄白が漢方医学を放棄し、西洋医学に転じた理由である。

玄白は、漢方医学の空理性についてつぎのように述べている⁶⁸⁾。

支那の書は方ありて法なきなり。法なきにあらざるも、法となす所以のもの明らかなり。その法たるや、人々の好むところに阿_{おもね}り、説を設け論をなし、立てて以て法となすなり。故に十書十説、いまだ一定せず。

玄白は、中国を支那と呼ぶ。漢方医書には「方」、すなわち薬方はあるが、「法」、すなわち原理がない。原理があったとしても、根拠がない。人びとが好みにしたがい説をとえ、それが原理であると主張する。諸説紛々し、いまだに定説がない。一氣留滯説（後藤艮山）、万病一毒説（吉益東洞）といった空疎な病因論が生みだされたのは、そのためである。周弼も、玄白などの先達がたどったおなじ思考をたどったであろう。

もうひとつは、「偏執固守ハ事實ニ融通相成かたく候」として、偏執固守の態度が「事實」を洞察する眼をふさぐ因由になると指摘する点である。17世紀以降、後世方医学に批判的な

立場をとる古医方が台頭する。古医方は、「実詣^{じつけい}」を重視する。「実詣」とは、「学問、芸能などを奥深くまできわめること」を意味する（『日本国語大辞典』）。「実詣」のために親試実験とよばれる実証的な方法が採用される。17世紀中葉から蘭学の勃興期にいたる時期、医学だけでなく、儒学、国学などの分野でも、「批判的・合理的・実証的精神」が鬱勃する。とりわけ医学の分野では、それが実験主義とむすびつき、親試実験主義が高唱される⁶⁹⁾。しかし、親試実験主義には科学的精神という点で限界があった。「古醫道ノ泰斗」後藤艮山⁷⁰⁾に師事した香川修庵は、「医学は病気を治す（療病）、あるいは病気にかからないようにする（養生）という現実の課題にとりくむ」として、医学を「技術」としてとらえる。したがって、「積み重ねた経験的事実を一般化して法則ないし理論を抽出するという方向へは、いいかえれば科学へは向かわない」。修庵は、患者に投与する薬物の選択にさいしては「治療に役立つかどうか、実際に効くかどうか」を「唯一の基準」とする。たしかに実証的な方法ではあるが、その科学的なメカニズムをさぐろうとはしない。艮山にとっては、「本草あるいは臨床医学書に先人が記載しているその特定の事柄を、間違いなくそうだと確認し、有効なものとして選択する方法が、『親しく試て驗有る者を撰び取る』、いわゆる『親試実験』である」⁷¹⁾。

山脇東洋は、後藤艮山に師事し、艮山、修庵、吉益東洞とともに「古方ノ四大家」と称せられる⁷²⁾。東洋は、荻生徂徠に私淑し、『周礼^{しゅうらい}』を信奉する。『周礼』天官には、医職、すなわち医師、食医、疾医、瘍医、獸医に関する規定がある。疾医の規定のなかに「九藏」ということばがある。注釈家は、それを五藏に胃、膀胱、大腸、小腸をくわえたものと解釈してきた。東洋は、かねて医書の臟腑説に疑問をいだいていた⁷³⁾が、「莫^レ若^レ解而觀^レ之」と考え、「其藏肖^レ人」といわれる^{かわうそ} 癩^{しやうらい}を解剖する⁷⁴⁾。宝暦4(1754)年閏2月、東洋は京都所司代の許可が得られたために、京都六角獄舎において処刑屍体の解剖を観察する。

杉田玄白は、その屍体解剖に触発され、つぎのように述べている⁷⁵⁾。

春秋甫二十二歳の時、同僚小杉玄適といへる男、京師の遊學より歸り來り、彼の地にて初て古方家といふ事を唱ふるの徒出ツ、其中に山脇東洋先生杯専ら此事を主張し、自ら刑屍を解て、觀臟し、千古説所の臟象大に異なる事を知られたり

玄白が、前野良沢、中川淳庵らとともに江戸千住の小塚原の刑場で行われた人体の腑分けを参観したのは、その17年後の明和8(1771)年3月のことである。かれらは、ドイツ人解剖学者クルムス(Johann Adam Kulmus)が出版した『解剖図表』(Anatomische Tabellen)の蘭訳書をたずさえていたが、東洋も私蔵する「苛^ヘ私^ス林^{リン}牛^キ私^ス解^ス體^ス書」⁷⁶⁾、すなわちオランダ人ヘスリング(Johann Vesling)が著した解剖書を屍体解剖にさいして参照する。東洋は、刑死体の解剖の記録をまとめ、宝暦9(1759)に『藏志』と題し、板行する。東洋は、いわゆる觀臟により、臨床治療の範囲内に限定される親試実験の域を脱し、「科学研究」

へとふみだす⁷⁷⁾。東洋の覬覬は、「覬覬の疎略さ」が指摘されるにしても、「偏執固守」をうちやぶり、「事實」を探求したという点で、西洋解剖学、ひいては西洋医学への道筋をつける。

周弼は、「漢洋兼學」という基本方針にもとづき、「漢學科目」、「洋學科目」、「専門諸科」を設定し、はじめて具体的な内容を明示する。

第 1 に、「漢學科目」として、「醫經」と「經方」をあげる。まず「醫經」は、『素問』と『靈樞』を「主書」とする。「醫經」は、曲直瀬道三を祖とする後世家が依拠する『黄帝内經』にはかならない。周弼は、「道三流兼西洋内科」を自称するが、それは漢方医学の師である能美洞庵が道三流をなのり、当時、「本道と云ふ方でなくては通らなかつた」⁷⁸⁾ からである。さらに、すくなくとも萩藩においては、西洋医学が漢方医学と併称される医学として認知されていなかったためであろう。西洋臨床医である周弼は、「醫經」は牽強附会の説がおおく、実証性にとぼしいと断定する。

つぎに、「經方」は、とりわけ古方家が「金科玉條」の医書としておもんじる『傷寒論』を「主書」とする。

そのほかに唐・宋代から清代にかけての医薬書、日本であらわされた医薬書も「經方」に属する。これらの諸書は、『傷寒論』の釈義書や研究書が中心であったとおもわれる。これらの諸書を可能なかぎり渉獵し、「病因」、「病證」、「治方」をそれぞれ弁明し、事実にもとづき検証しなければならない。「實徵」、すなわち「真実の証拠」（『日本国語大辞典』）にもとづく親試実験を宗とする古方家の医方、すなわち古医方につうじるものである。周弼が後世方医学を痛切に批判するのは修業した経験があるからであろう。周弼が古医方医学についてどの程度理解していたか不明であるが、古医方医学についてはむしろ近親感をいだいていたのではないかとおもわれる。それは、周弼が能美友庵の学僕時代に三田尻稽古場において徂徠学をまなんだことと無関係ではないであろう。古医方医学は、徂徠学に触発され、生まれたものである。

第 2 に、「洋學科目」は「譯書」と「原書」の課程にわかれる。まず、「譯書」は翻訳書により西洋医学をまなぶ課程である。西洋医学の概要を把握するために、生理学書・解剖学書、病理学書、診療学書、薬剂学書・化学書の順に講読しなければならない。これらの訳書は、すでに板行されていたが、書籍は高価であるために、必要に応じて書写しなければならない。

つぎに、「原書」は西洋医書を講読する課程である。初学者は、通詞と同様に、まずオランダ語文法を習得しなければならない。周弼は、坪井塾に入門すると、オランダ語の習得に専念する。そのさい、「たまたま伊東玄朴が長崎から、和蘭の文典『ガラマンチカ』と『セントキス』の二冊を持ちかえつていた」ために、同門の川本幸民、緒方洪庵とともに筆写し、後学の指導にも活用する⁷⁹⁾。「和蘭の文典」は、箕作阮甫が天保13(1842)年に『和蘭文典』前編、通称「ガラマンチカ」を、嘉永元(1848)年に『和蘭文典』後編、通称「セイタキス」

を刊行して以来、オランダ語学習のための不可欠のテキストとして使用される。元治元(1864)年春に好生堂へ入門した青木周蔵は、「青木周弼及ヒ其弟研蔵並ニ和蘭文典ニ精通スル烏田圭蔵氏等ノ教授ヲ受ケ」、オランダ語を習得する⁸⁰⁾。萩藩医学校では『和蘭文典』により「文法」を習得しなければならなかった。

『和蘭文典』全編をおえ、辞書をひもときながらオランダ語原書を読解することができるようになると、オランダ語原書の講読のグループにうつり、会読にくわわる。周弼は、建議では具体的な書名を明示しないが、医書だけでなく、物理書、天文地理書などを渉猟することを奨励する。それらを基盤として、医書を熟読し、臨床に応用することができると考えるからである。「原書」の学科課程は明示されないが、「原書」と同様に、生理学・解剖学、病理学、診療学、薬剤学・化学という系統的な課程が設定されていたことはいうまでもない。

第3に、「専門諸科」についても、鍼治科、眼科、外科については、「家筋」、すなわち流派が容認される。鍼治科、すなわち鍼科、眼科、外科については、芸術、芸能、武道などと同様に、多様な流派、すなわち「流儀の違いによるそれぞれの系統」(『広辞苑』第6版)が形成される。嘉永3(1850)年8月、好生館の開館にさいし、あらたに教職員16名が任命される⁸¹⁾。そのうちわけは、道三流8名、人見法印慶安伝1名、道三流兼西洋内科2名、意斎流・道三流1名、南蛮流1名、阿蘭陀流1名、道三流・坂寿三伝1名、福井斎伝1名である。意斎流は、安土桃山時代から江戸時代前期の鍼医である御蘭意斎が創始した意斎流打鍼術をうけつぐ鍼科の一流派である⁸²⁾。坂寿三伝は、寛永年間に江戸幕府の法印坂寿三を祖とする鍼科の一流派である。寿三は、天和元(1681)年には、幕府の「御針立」として「八百石」の俸禄を食んでいた⁸³⁾。鍼科には、そのほかに杉山、駿河、吉田といった流派がある⁸⁴⁾。

南蛮流とは、沢野忠庵、すなわち元ポルトガル人イエズス会宣教師フェレイラ(Christovão Ferreira)を祖とする「南蛮和蘭流」⁸⁵⁾であろうか。阿蘭陀流は、鎖国のもとでオランダ商館医師からつたえられた「和蘭流外科」であり、オランダ通詞により檣林流、吉田流、西流、栗崎流といった流派がたてられる⁸⁶⁾。杉田玄白は、享保18(1733)年9月、小浜藩主酒井家につかえる和蘭流外科の家に生まれ、古文辞学派の宮瀬竜門に漢学を、幕府奥医師の西玄哲に阿蘭陀流外科をまなぶ。明和8(1771)年3月に『解体新書』の翻譯に着手するまえには、「ひろく和・漢・蘭の外科療法の集大成」をめざした『瘍家大成』を編述していた⁸⁷⁾。瘍家とは、外科医のことである。玄白の時代には、『阿蘭陀外科伝書』が流布していたが、玄白と親交があった一関藩医建部清庵は『阿蘭陀外科伝書』について以下のように述べている⁸⁸⁾。

阿蘭陀医も己が用ひなれたる事計^{ばかり}を、口に任せて言ひしを、筆まめに書たるが、八卷書・十二卷書など、いう伝書となりたるものなるべし。去^{さる}によつて何の書にも同じ事のみ多し。それを本にして、唐の医書の外科の部から抜集め、病論を集合したるものと見ゆる也。正真の阿蘭陀医書といふものにはあらざるべし。

『阿蘭陀外科伝書』は、「阿蘭陀医之著述」ではなく、「通詞を頼て色々の事を聞書にしたるもの」に、中国医書の外科に関する記述から抜き出したものをくわえたものにすぎない。

眼科は、日本眼科医の祖とされる馬島清眼^{まじませいがん}が南北朝時代に創始した馬島流が代々うけつがれ、江戸中期には家里、笠原、竹内、田原などの諸流が生まれる⁸⁹⁾。馬島流は、萩藩医の馬島本家と別家によって継承される⁹⁰⁾。西洋医学がつたえられると、本庄晋一の『眼科錦囊』にみられるように「漢蘭折衷ノ眼科」があらわれる⁹¹⁾。この時点で任命された教職員のなかには、眼科を専門とするものはいない。「阿蘭陀流眼科」を名のる和田昌景は、嘉永4(1851)年に死没するが、その流派は養子の文譲や門生にひきつがれる。

周弼が起草した「医学所規則」案では、漢方医学課程の医生は西洋医学を修学する必要はないが、西洋医学課程の医生は漢方医学をまなんだのちに西洋医学課程にすすむことになる。「漢洋兼学」の原則は、西洋医学課程にすすむ医生だけに適用される。西洋医学課程を萩藩医学校の主流に位置づけようという意図がうかがわれる。

「医学所規則」案に修正がくわえられ、嘉永3(1850)年12月、「本書申出之通被_レ仰付_二候事」_一と指令される。修正案はつぎのとおりである⁹²⁾。

本朝は學術制度大概漢土ニ倣ひ、醫術亦岐黃之道久敷世ニ傳り、方法、彼を以模範と仕来り候、近来、西洋学専ら行れ、漢人未發之理を窮、事実上ニ裨益有_レ之候様相見候、素_レ學風は時運ニ隨ひ、変易も有_レ之難一定候得共、畢竟濟世を以標準となすへし、殊に学校之儀は博く采_レ之

御趣意筋ニ候へは、漢学西洋学共御取用被_レ成、漢洋兼学之上、折衷を以本領とす、然処人才長短も有_レ之、一概ニ難_レ被_二仰付_一、左之通科目被_レ立置候間、入学之面々、御規則を照筈して、所志之科目ニ従事し、日夜勉強、天賦を奉へし、醫術は他之藝術と異ニして、今日之讀書、明日事実ニ相試候事ニ付、尊学謹慎は申迄も無_レ之候

漢學

醫經

血脈、經絡、骨髓表裏ニ原キ、百病之起本、死生ノ分ヲ論シ、科目ノ素問、靈樞等、此主書トス、勿論、牽強ノ説も可有之候得共、金言確論多く醫門ノ經とも可言へき書ニ候得は、初學之徒、其大略ヲ會得スヘシ

經方

藥名ノ寒温ニ本キ、疾病之淺深を量り、其失常ヲ平復せしむる方法を論し、科目之傷寒論は此科之主書にして、方法之鼻祖、醫門之金科玉條とす、注意研究すへし、其餘唐宋以下□朝迄之諸書、並本朝先輩之著書、多く此科目ニ附屬ス、博覽して、其大概を得とくすへし

洋書

譯書

西洋書、於本朝翻譯ヲ經タル書ニ就て學ふへし、科目之解剖書、生理書、病學書、治療書、藥性書、舍密書、此次序ニ隨ひ、漢學舊套之外ニ一新眼を以研究ニ俟へは、西洋醫道之大義を會得すへし

原書

西洋書之原文ニ就而習讀科目也、初學は洋書之義理よりハ文法を研究すへし、猶醫書に限らず、窮理書其外習讀不苦侯、語辭暗記、文法會得之上は専ら醫書を研究し、事實に徴すへし

諸科

本草科 産科 嘔科

専門

鍼治科 口中科 眼科 外科

右専門は其家筋被立置侯得は、専一ニ其本職を研究し、餘力ヲ以他之科目を學へし

まず、前文の基本方針については、第1に、「医学所規則」案から、藩医の子弟以外の地下医、町医、陪臣医の受け入れに関する箇所が削除される。馬関攘夷戦において、アメリカとフランスの軍艦に反撃され、武士階級が無力さを露呈したために、高杉晋作が藩命により奇兵隊を編成するのは、文久3(1863)年6月のことである。嘉永3(1850)年前後の段階では、萩藩が封建的な身分制度をあらためなければならぬような要因はみあたらない。

第2に、「漢洋兼学」の原則は「折衷」の原則にかわる。「折衷」は、「いろいろな物からいいところをとり、一つにあわせること」(『広辞苑』第6版)である。このばあいには、「折衷」は漢方医学と西洋医学の折衷を意味する。「折衷」の基本原則が導入されれば、医生は漢方医学だけをまなぶことはゆるされない。漢方医を志望するにしても、西洋医学を兼修しなければならない。しかし、ふたたび「人才長短も有之、一概ニ難被仰付」⁹³⁾、すなわち人才には長短もあり、一概に西洋医学の修業を命じることはできない、という留保条項がしめされる。それは、西洋医学の適性がないものにはその修業を猶予するという意味である。同時に、末尾に注記されているとおり、「専門」科目の流派に属するものは、「其本職」の研究に専念しなければならない。とりわけ「鍼治科」については、大宝律令以来、針師・針博士・針生の存在がしられる。針灸は「邪氣ヲ瀉スル」ために、「湯藥其内ヲ攻メ、針灸其外ヲ攻ム」、すなわち針灸は藥物療法と同時並行しておこなわれる⁹³⁾。針灸科は、鎌倉時代以降、医官制度の廃止により衰退するが、江戸時代中期、5代將軍徳川綱吉が鍼術を再興し、以後、杉山、駿河、吉田といった流派がうまれ、諸藩にも浸透する。なお、「岐黄之道」は、前述の黄帝と岐伯の学問である。

つぎに、修学科目については、基本的な枠組みは継承される。「漢學」の「醫經」につい

ては、部分的に書きあらためられる。周弼の原案では、「醫經」は「血脈、臟腑、陰陽、表裏、五運、六氣」といった「百病之起原」あるいは「死生之分」について論じる、とされるが、「血脈、経絡、骨髓表裏」にもとづき「百病之起本」あるいは「死生ノ分」を論じる、という表現にあらためられる。「醫經」の「主書」である黄帝内經の『素問』と『靈樞』は後世方が信奉する中国医書である。江戸初期には後世方医学に批判的な立場をとる古医方が台頭する。古医方が批判するのは、後世方が「陰陽、表裏、五運、六氣」などとの結びつきがよいために、空理空論にながれる傾向がある点である。後世方の弱点として指弾されていた部分が書きあらためられたことになる。「臟腑」が削除されたのは、前野良沢などの解体新書グループにより「醫經」の内景に関する記述の誤りが指摘されていたからである。江戸小塚原の刑場で屍体解剖を実見した杉田玄白は、つぎのように述べている⁹⁴⁾。

古来醫經に説きたる所の肺の六曜葉兩耳、肝の左三葉右四葉などいへる分ちもなく、腸胃の位置形状も大いに古説と異なり

「醫經」は、こじつけが多いだけでなく、解剖実見からもうかがえるように、事実と反する認識もある。洞庵がどのような意図で書きあらためたかがいしることはできない。

「洋學科日」は「洋書」という表現にかわり、周弼原案のとおり「譯書」と「原書」に区分される。第1に「譯書」については、「科目」にかわり、「書名」が提示され、あらたに「生理書」がくわえられる。西洋医学の学科課程の構造について、周弼の旧師である坪井信道は、つぎのようにしるす⁹⁵⁾。

蓋西醫之道、以明人身内景為本。原生原病次之。而後藥劑治方從之。譬諸構室、内景礎也、原生原病柱也、藥劑治方樓屋也。今也礎而末柱、遽然架屋、無此理也。

西洋医学は、人体の内部構造をあきらかにすることを基本とする。杉田玄白は、「凡ソ醫を業とするもの、先ツ始に形體內景の平素を精究することを第一にとる事なり」と述べている⁹⁶⁾。解剖学が医学の根幹であるという認識はすでに玄白において形成されていた。解剖学をまなんだうえで、病理学、さらに薬劑治法を修学しなければならない。建物にたとえば、人体の内部構造が礎石であり、生理学（原生）と病理学（原病）が支柱であり、薬劑治法が屋根である。現在は基礎の段階であり、いまだに支柱もたっていない。突然に屋根をかけるのは理にかなわないことである。

周弼は、信道が明示した解剖学、病理学、生理学といった基礎科学から臨床医学にいたる学課課程を継承する。「舎密書」をつけくわえたのは、処方総論、製薬の方法、薬品、処方術について概説する実用的な処方書である『袖珍内外方叢』⁹⁷⁾の訳述にかかわり、化学的知識の必要性を痛感したからであろう。

第2に、「原書」については、なによりもオランダ語文法の習得を優先しなければならない。

文法をまなびながら、単語や言語表現を暗誦する。文法を習得したのち、「譯書」で提示された次序にしたがい医書を講読しなければならない。そのさいも、「事實に倣す」、すなわち実証的な姿勢をわすれてはならない。

さいごに、「専門諸科」については、「諸科」と「専門」に区分される。周弼の原案では、「諸科」は「内科」から派生したものであり、「漢学科目」と「洋学科目」の医書に散見されるとし、具体的な学科名が明示されなかったが、あらたに「諸科」が設定され、そこに「啞科」が追加され、「産科」も「諸科」にうつされる。「専門」に漢方医学の「口中科」が追加される。「諸科」と「専門」の関係はあきらかではない。「啞科」については、「小兒、是レヲ啞科ト曰フ、疾痛シテ物イフコト能ハズ、故ニ當サニ脈ヲ審ニシ、形ヲ觀、色ヲ察シ、聲ヲ聽キ、手紋ヲ視、外證ヲ詳ニスベシ」といわれる⁹⁸⁾。「啞科」は、西洋医学の小児科にあたる。「口中科」は、「口病・舌病・齒病・咽喉病ノ治術ヲ專ト」する専科であり⁹⁹⁾、西洋医学の咽喉科と歯科に該当する。

規則修正案は、さらに手をくわえられ、嘉永4(1851)年2月11日付で「醫學所規則」¹⁰⁰⁾と「教諭申聞セノ条」として公布される¹⁰¹⁾。

醫學所規則

- 一 醫道ハ司命濟世ノ重職ニシテ、上君親ノ疾ヨリ、下貧賤ノ厄ヲ療救イタシ侯事ニ侯得ハ、公平正大ノ心掛ヲ以テ、王家仁政ノ主意ヲ不_レ失、好生ノ一端ヲ補助イタシ侯様可_レ爲_二肝要_一侯事
- 一 學術ノ儀ハ実学ヲ以テ旨トシ、空論鑿說ニ拘泥スヘカラス侯事
- 一 薬剤処方ノ儀ハ、古人ノ方論ニ本キ可_レ申、自己ノ臆斷ヲ以、輕ク人命ヲ試ミ申間敷侯事
- 一 匙ノ妄投一味錯置モ生死ニ係リ侯事ニ侯得ハ、謹慎精密心掛肝要ニ侯事
- 一 課業ノ式ハ、科目ノ通順次可_レ被_二相学_一侯、一家学ヲ主張シ、虚傲偏執ノ弊有_レ之間敷侯事
- 一 読書ノ儀ハ博采通覽ヲ旨トシ、古今ヲ不_レ論、和書洋書トモ悉皆読誦可_レ致侯、方法ハ純粹簡要ニシテ、日用事實ニ的切ノ処ニ着眼注意可_レ申侯事
- 一 至貴ノ人命ヲ被_二委付_一侯職事ニ侯得ハ、誠意正心ニシテ、愛憐ノ心掛深く有_レ之儀侯、名聞利慾ニ趨侯儀ハ堅ク可_レ被_二相禁_一侯事
- 一 修業中、持方ケ間敷儀無_レ之様ニシテ、万端行儀正シク、先進ノ指揮ヲ可_レ被_二受_一侯、尤長幼尊卑ノ等ヲ相凌キ申間敷侯事
- 一 十七八歳迄專一ニ儒学研究可_レ致侯、第一ニ彝倫ヲ明ニシテ、義理ニ通曉シ易ク、醫ヲ学フノ基礎ナリ、尤詞藻ニ耽リ、本職ヲ忘却不_レ致侯様肝要ニ侯事
- 一 醫術ノ儀ハ、終身ノ一大業ニ侯得ハ、仮令年老タリトモ廢学スヘカラス侯事

一学頭申聞候条目、豎可_レ被_レ相守_レ候事

「医学所規則」は、周弼の規則案の基本方針に関する部分を箇条書きに書きあらためたものである。「医学所規則」は、文久元(1861)年2月に「好生堂増補規則」が制定されるまでの10年ほどのあいだ効力をもつ。萩藩医学校が西洋医学校に再編成される道程において、ひとつのおおきな節目となる規則である。そうした観点から、ふたつの点に付言しておく。

ひとつは、嘉永3(1850)年12月の修正案の「折衷」の原則が継承された点である。しかも、「人才長短も有_レ之、一概ニ難_レ被_レ仰付_レ」といった留保条項は削除される。医生は、漢方医を志望するにしても、西洋医学をまなばなければならない。「医学所規則」は、禁止条項として、西洋医から見た漢方医学の欠陥を列举する。第1に、「空論鑿説ニ拘泥スヘカラス」として漢方医学の虚構性を指摘し、「実学」に徹するようもとめる。第2に、「薬剂処方」については、「自己ノ臆断ヲ以、軽ク人命ヲ試ミ申聞敷候事」として「臆断」をいさめるだけでなく、「匙ノ妄投一味錯置」として「謹慎精密」な態度をもとめる。「支那の書は方ありて法なきなり」という杉田玄白の言葉が想起される。第3に、「一家学ヲ主張シ、虚傲偏執ノ弊有_レ之間敷候事」という条項は、後世派、古方派、折衷派といった漢方医学の流派に拘泥することをいさめたものである。漢方医学にみられる学統・学派への固執を否定し、「実学」を称揚することにより、西洋医学の実証主義への志向を示唆する。青年期に「儒学」をまなぶようもとめるのは、「彝倫」をまなばせ、「義理」をわきまえさせるためである。漢方医学の基礎となる「漢学」をまなぶためではない。

もうひとつは、「医学所規則」には教授科目は明示されないが、「科目ノ通順次可_レ被_レ相守_レ候」という条項からうかがわれるとおり、すくなくとも「洋学科目」については、周弼が規則原案で提示した系統的な教授・学習課程が採用される。

おわりに

本稿では、萩藩医学校の会頭役に任じられた青木周弼がはじめて起草した「医学所規則」案から修正案をへて、嘉永4(1851)年2月の成案、すなわち「医学所規則」にいたる過程をあとづけることにより、周弼が思い描く西洋医学校構想のプロトタイプをデッサンしようとしたところみた。稿をおえるにあたり、ふたつの点に言及しなければならない。

ひとつは、周弼がどのような理由で萩藩医学校を西洋医学校に再編しようとしたのか、という点である。

嘉永3(1850)年秋に周弼が起草した「医学所規則」案は、2度にわたり書きあらためられる。周弼の原案を筆削することができるものは、能美洞庵のほかにはない。洞庵は、萩藩医学校を主宰する教諭役の地位にあっただけでなく、「始めて我藩に於いて西洋医方を唱え」¹⁰²⁾、周弼を萩藩医に推薦して以来、萩藩医学校を西洋医学校に再編成しようと機会をうかがって

いたからである。洞庵は、周弼の所懐をききただし、真意を確認しながら、周弼の規則案に朱をいれたであろう。朱をいれるのは、周弼の構想を実現するためである。

周弼が規則案を起草し、洞庵が朱をほどこす過程は、藩医のなかで多数を占める漢方医の執拗な抵抗をうけながら、漢方医学を論難し、西洋医学を称揚する過程にほかならない。周弼は、みずからの漢方医学観あるいは西洋医学観を披瀝し、萩藩医学校を西洋医学校に再編しなければならない理由に言及せざるをえない。文久元(1861)年2月に「好生堂増補規則」が制定されるまでの10年ほどのあいだ効力をもつ「医学所規則」から、オランダから舶載された医薬書の訳著がある周弼の漢方医学観に関する部分をひろいあげ、それらについて検討する。

第1に、周弼は「學術ノ儀ハ実学ヲ以テ旨トシ、空論鑿説ニ拘泥スヘカラス」として、漢方医学の科学性あるいは学理性に疑問を呈する。江戸期には、後世方、古医方、折衷派といった漢方医学の流派が生まれる。後世方は、前漢末から後漢はじめにかけて整理編纂された『黄帝内経』に依拠する。古医方は、後漢末の張仲景の『傷寒論』を聖典視する。こうした流派は、みずから依拠する中国医書に関する多数の研究書を生みだす。『傷寒論』だけでも400種におよぶ研究書が生みだされる。それは、章句にこだわり、字句の穿鑿に埋没した帰結である。周弼は、後世方医学については、「素より牽強附會之説多ク、事實ニ無_レ益事ニ有_レ之侯」と述べ、牽強附会の説がおおく、実証性にとほしいと断じる。古医方医学については、古医方が信奉する諸書について「病因病證治方別而辨明して、事實上ニ實徵致候様肝要之事」と述べ、病因、病症、治療法をそれぞれ弁明し、事実にもとづき検証しなければならないと論じる。周弼にとっては、医学は、「実学」、すなわち「応用を旨とする科学」(『広辞苑』第六版)であり、章句に拘泥したり、空論を主張したりすることはゆるされない。

「薬剤処方」について、「自己ノ臆断ヲ以、輕ク人命ヲ試ミ申間敷候事」として「臆断」をいさめるのも、医者職務が学理にもとづくものであるという認識による。「古方ノ四大家」のひとりである香川修庵は、医学を「技術」としてとらえ、患者に投与する薬物の選択にさいしては「治療に役立つかどうか、実際に効くかどうか」を「唯一の基準」とする¹⁰³⁾。実証的な方法ではあるが、その科学的なメカニズムをさぐろうとはしない。漢方医学の医家は、聖人の言説の釈義に没頭するあまり、経験主義的な薬物学の域を脱することができない。「支那の書は方ありて法なきなり」という西洋医学の潮流をつくりだした杉田玄白の言葉が想起される。

江戸中期以降にあらわれる「蘭方医」と呼ばれる医者は、漢方医としての修業をつんだのちに、西洋医学を選択する。周弼は、その理由に言及する(「医学所規則」案)。

近來西洋學専ら世ニ行レ、議論寸法も別ニ一道を開らき、漢人未發之理を究メ、治療上ニ裨益有_レ之侯様相見候

周弼は、みずから修業した漢方医学とは次元がことなる西洋医学にたどりつく。それは、「漢人未發之理」、すなわち漢方医学にはみられない「理」をきわめ、臨床に有効な手だてを提供するものである。日本につたえられた西洋医学は、「科学革命の洗礼を受けた後の、近代医学」である。西洋医学に転じた医者は、西洋医学の科学性に鮮烈な衝撃をうけたであろう。それだけに、漢方医学の科学性に失望したであろう。しかし、漢方医学の科学性については、つぎのような見解もある¹⁰⁴⁾。

東洋医学の概念には、未科学性——科学の試練をうける前の、経験や自然哲学に基づいた思考法——が含まれていよう。いうまでもなく、未科学とは、非科学や反科学の意味ではない。ただ、西洋近代に成立した化学的思考法によって、検証をうけていないということだけにすぎない。

第2に、周弼は「一家学ヲ主張シ、虚傲偏執ノ弊有_レ之間敷侯事」として、漢方医学の党派性をいさめる。それは、家学への偏執と傲慢な態度が「事實」を洞察する眼をふさぐ因由になるからである。杉田玄白は、漢方医学について、「素靈に杜_レ稷_レし、仲景・思邈_レ・王_レ素等_レの書に本づきて、説を立て論をなし一家をなすと称するも、皆これ憶度附会して、人々その好むところに阿_レり、我意を以て事を決すれば、正_レ鵠となすに足らず」と述べている¹⁰⁵⁾。漢方医学は、聖人の言説を遵奉し、それぞれに流派を形成する。しかし、それらはみな当て推量によるこじつけにすぎず、世におもねるだけである。恣意的に歪曲したものだけに、核心をつくことはできない。

もうひとつは、西洋医学校としての萩藩医学校の学科課程がどのようなものであったのか、という点である。

周弼は、西洋医学の学科課程を「譯書」課程と「原書」課程に区分し、「解剖書」、「生理書」、「病学書」といった基礎医学から、「治療書」、「薬性書」、「舍密書」という臨床医学にいたる学課課程を設定する。内景、すなわち人体の内部構造をあきらかにする解剖学が医学の根幹であるという認識はすでに杉田玄白において形成されていたが、旧師坪井信道は基礎医学から臨床医学にいたる学課課程を明示する。第2次海軍伝習のオランダ教師団の一員である海軍二等軍医ボンベ（Pompe van Meerdervoort）が安政6（1857）年9月に「一連の講義課程」をさだめ、長崎において医学伝習をはじめた。それは、「物理学、化学、繙帯学、人体解剖学、組織学、健康人体の理学総論及び各論（生理学）、病理学総論と内科学、薬理学、外科学理論及び外科手術学、眼科学」からなる¹⁰⁶⁾。坪井信道がとりいれたのは、同時代の西欧の医学教育の学科課程にはかならない。信道門下の周弼は、同時代の体系的な西洋医学の学科課程を萩藩医学校に採用しようとしたことになる。

周弼は、「譯書」課程を変則的な課程として位置づけ、「原書」課程を正則課程と位置づける。「原書」課程は、オランダ語文法を習得し、オランダ語の医書を講読することにより、

西洋医学の臨床に応用するための課程である。

「医学所規則」は、萩藩医学校を西洋医学校に再編するための準備段階の規則にすぎない。本格的な西洋医学校に再編するためには、藩医の世襲制という障壁をくずし、西洋医学の受容基盤を整備しなければならない。藩医のなかで多数を占める漢方医は、「其本職」、すなわち父祖伝来の流派に固執し、「一新眼」をもって西洋医学を研究しようとはしない。地下医、町医、陪臣医に門戸を開放すれば、「醫を以糊口ニ仕、種々口佞世上發行仕侯」庸医を駆逐し、西洋医学を研鑽した医者を藩医に登用するだけでなく、全藩域に西洋医を供給することもできる。西洋医学を専門とする萩藩医は、周弼をはじめ、斉藤方策、坪井信道などすべて世襲の藩医ではない。周弼の脳裡では、たんなる藩医の再生産機関から脱皮した萩藩医学校の像がむすびはじめる。

【註】

- 1) 田中助一、『防長医学史』下巻，聚海書林，昭和59年（昭和28年初版），130頁。
- 2) 同上書，405～407頁。
- 3) 正橋剛二編，『裡園小石先生叢話——復刻と解説』，思文閣出版，2006年，111頁。
- 4) 田中助一著刊，『能美洞庵』，昭和16年，27頁。
- 5) 「好生堂醫學引痘沙汰控」，「毛利家文庫」，山口県文書館所蔵。訓点筆者。
- 6) 「擇醫」，貝原篤信編録，『養生訓』巻第6，天保5（1834）年，播磨屋利助，早稲田大学図書館所蔵。
- 7) 伊藤仁斎，清水茂校注，『童子問』，岩波書店，2001年（1970年第1刷），135頁。
- 8) 武陽隱士，本庄栄治郎校訂，奈良本辰也補訂，『世事見聞録』，岩波書店，2010年（1994年第1刷），173～174頁。
- 9) 「旧高知藩学校」，文部省，『日本教育史資料』二，富山房，明治23年（鳳文書館，昭和63年復刻），923頁。訓点筆者。
- 10) 緒方富雄，『緒方洪庵伝』，岩波書店，昭和17年，127～128頁。
- 11) 篠崎弼書，「斎藤方策墓誌」，書写年不明，早稲田大学図書館所蔵。
- 12) 『防長医学史』下巻，209頁。
- 13) 嘉永3（1850）年6月25日付，山口県教育会編刊，『村田清風全集』下巻，昭和38年（マツノ書店，昭和60年復刻），533～534頁。『青木周弼』，203～204頁。
- 14) 馬場佐十郎訳，小川鼎三・酒井シズ校注，「遁花秘訣」，『洋学』下，日本思想大系65，岩波書店，1972年，362頁。
- 15) 同上。
- 16) 阿部魯庵書簡，青木周弼宛，嘉永2年7月22日付，『医業成立沙汰控』，「毛利家文庫」。訓点筆者。
- 17) 鍵山栄，『佐賀の蘭学者たち』，佐賀新聞社，昭和51年，88頁。
- 18) 古賀十二郎，『長崎洋学史』下巻，昭和42年，長崎文献社，329頁。
- 19) 深瀬泰旦，『わが国はじめての牛痘種痘 植林宗建』，2006年，出門堂，49頁。
- 20) 呉秀三，『シーボルト先生其生涯及功業』，吐鳳堂書店，明治29年（大正15年第2版），715頁。
- 21) 青木研蔵書簡，青木周弼宛，嘉永2（1849）年8月25日付，『防長医学史』下巻，461～462頁。訓点筆者。
- 22) 石田純郎，『緒方洪庵の蘭学』，思文閣出版，1992年，105頁。
- 23) 嘉永3（1850）年9月周弼書簡，江戸藩政府宛，「江戸御状控」，「毛利家文庫」。訓点筆者。
- 24) 「御在国控」，嘉永2（1849）年9月9日，「両公伝史料」，山口県文書館所蔵。訓点筆者。

- 25) 『防長医学史』下巻, 331~337頁。
- 26) 久坂玄機書簡, 中井次郎右衛門・坪井九右衛門・赤川嘉兵衛・山田亦助宛, 弘化3(1846)年11月5日付, 「西洋学御引立一件沙汰控」, 「毛利家文庫」。
- 27) 345頁。下線部, 割注。
- 28) 「九仞日記」安政己未六月, 福本義亮, 『久坂玄瑞遺稿』, 昭和9年, 誠文堂(『久坂玄瑞全集』, マツノ書店, 平成4年改題復刻), 241頁。
- 29) 「江月齋日乗」庚申, 同上書, 253頁。下線部割注。
- 30) 池田哲郎, 「毛利藩の蘭学」, 『蘭学資料研究会研究報告』第95巻, 昭和36年10月, 100頁。
- 31) 「好生堂醫學引痘沙汰控」。
- 32) 『緒方洪庵の蘭学』, 39頁。
- 33) 同上書, 41頁。
- 34) 石田純郎, 『オランダにおける蘭学医書の形成』, 思文閣出版, 2007年, 27頁。
- 35) 日野宗春撰写, 「青木周弼略伝」, 「諸家文書」, 山口県文書館所蔵。
- 36) 内演説, 嘉永2年9月, 「好生堂醫學引痘沙汰控」。訓点筆者。
- 37) 『防長医学史』下巻, 9~10頁
- 38) 高於菟三・高壮吉, 『高良斎』, 高於菟三, 昭和14年(大空社, 1994年覆刻), 17頁。
- 39) 『防長医学史』下巻, 106~107頁。
- 40) 「引痘方上申」, 嘉永2年10月, 「好生堂醫學引痘沙汰控」。訓点筆者。
- 41) 赤川玄悦・青木周弼・久坂玄機上申, 嘉永2年10月, 「好生堂醫學引痘沙汰控」。訓点筆者。
- 42) 地方執政手元役兎玉三左衛門・唐船方三宅忠左衛門書簡, 江戸方執政手元役仁保弥右衛門宛, 嘉永2年10月24日付, 『防長医学史』上巻, 139~140頁。
- 43) 「好生堂醫學引痘沙汰控」。訓点筆者。
- 44) 西丸哲哉, 『日乗——幕末の地下医古谷道庵』, 豊浦町中央公民館, 1987年, 27頁。
- 45) 『防長医学史』上巻, 145頁。
- 46) 「好生堂醫學引痘沙汰控」。
- 47) 小野沢精一, 『書経』下, 明治書院, 昭和60年, 368~371頁
- 48) 『忠正公伝』第8編, 「両公伝史料」。
- 49) 「御直書控」嘉永三年, 「毛利家文庫」。原典確認済
- 50) 「擇醫」。
- 51) 富士川游撰, 『日本医学史綱要』, 克誠堂書店, 昭和8年(日本医史学会, 昭和16年復刻), 63頁。
- 52) 大塚敬節, 『漢方医学』, 創元社, 2001年, 39頁。
- 53) 富士川游, 『日本医学史』, 日新書院, 昭和16年, 342頁。
- 54) 日本漢方医学研究所編, 『金匱要略講話』, 創元社, 1979年, 3頁。
- 55) 佐藤昌介, 「洋学的思想史的基礎考察——医学思想を中心にして」, 豊田武教授還暦記念会編, 『日本近代史の地方的展開』, 吉川弘文館, 昭和48年, 509頁。
- 56) 小曾戸洋, 『漢方の歴史——中国・日本の伝統医学』, 大修館書店, 1999年, 68~75頁。
- 57) 矢数道明, 『近世漢方医学史』, 名著出版, 昭和57年, 9~10頁。
- 58) 「旧和歌山藩学校」, 『日本教育史資料』二, 835頁。
- 59) 「御直書控」嘉永三年。
- 60) 福田安典, 「医案(江戸の診察カルテ)と出版」, 『江戸文学』第16巻, 1996年10月, 104頁。
- 61) 戸出一郎・別部智司・雨宮義弘, 「医学館で行われた口科考試について」, 『日本歯科医史学会会誌』第24巻第3号, 平成14年3月, 170~171頁。
- 62) 緒方富雄, 「坪井信道塾の研修記録としての前田信輔筆『日習堂医按』」, 『日本医史学雑誌』第16巻第3号, 昭和45年6月, 94頁。
- 63) 岡原義二, 『青木周弼』, 青木周弼先生顕彰会, 昭和16年(大空社, 1994年復刻), 216~219頁。訓点筆者。
- 64) 「擇醫」。
- 65) 川喜田愛郎, 『近代医学の史的基盤』上, 岩波書店, 1977年, 350頁。
- 66) 杉田玄白, 『狂医之言』, 『日本思想史大系』64, 岩波書店, 1976年, 231頁。
- 67) 『大学』, 金谷治訳注, 『大学・中庸』, 岩波書店, 2010年(1998年第1冊), 36~37頁。

- 68) 『狂医之言』, 234頁。
- 69) 有坂隆道, 「親試実験主義の展開」, 『ヒストリア』第8号, 昭和28年12月, 54頁。
- 70) 『日本医学史綱要』, 126頁。
- 71) 山田慶兒, 「反科学としての古方派医学」, 『思想』985号, 2006年5月, 46~47頁。
- 72) 『日本医学史綱要』, 165頁。
- 73) 「反科学としての古方派医学」, 51頁。
- 74) 山脇尚徳, 山脇侃校, 『藏志』乾之卷, 寶暦9(1759)年跋, 養寿院(京都), 早稲田大学図書館所蔵。
- 75) 杉田鷗斎, 杉田伯元校, 『形影夜話』卷上, 文化7(1810)年, 塙東居(京都), 早稲田大学図書館所蔵。読点筆者。
- 76) 「凡例」, 与般重単闕児武思原著, 杉田玄白訳, 中川淳庵校, 『解體新書』, 安永3(1774)年, 須原屋市兵衛。
- 77) 「反科学としての古方派医学」, 51頁。
- 78) 日野宗春談, 伊内左助速記, 「日野宗春翁雜談」, 山口県文書館所蔵。
- 79) 小沢清躬, 『蘭学者川本幸民』, 川本幸民顕彰会, 昭和23年, 16~17頁。
- 80) 『青木周蔵筆記』第一, 「青木周蔵関係文書」, 国立国会図書館憲政資料室所蔵。
- 81) 『青木周弼』, 206~209頁。
- 82) 『日本医学史』, 246~247頁。
- 83) 服部敏良, 『江戸時代医学史の研究』, 吉川弘文館, 昭和53年, 777頁。
- 84) 『日本医学史』, 386頁。
- 85) 『日本医学史綱要』, 92頁。
- 86) 『日本医学史』, 301~304頁。
- 87) 佐藤昌介, 「蘭学における実理と実用——杉田玄白の医学思想を中心にして」, 『科学史研究』第2期, 第13号, 1974年, 75頁。
- 88) 杉田玄白, 『和蘭医事問答』卷之上, 『日本思想史大系』64, 岩波書店, 1976年, 193頁。
- 89) 『日本医学史綱要』, 148頁。
- 90) 『防長医学史』下卷, 66~70頁。
- 91) 『日本医学史綱要』, 196頁。
- 92) 「好生堂醫學引痘沙汰控」。訓点筆者。
- 93) 『日本医学史綱要』, 41頁。
- 94) 杉田玄白, 大槻茂質補記, 『蘭学事始』上之卷, 書写年不明, 林洞海(写), 早稲田大学図書館所蔵。
- 95) 「坪井信道序」, 緒方章訳述, 宇田川瀛・坪井信道序, 『病学通論』, 弘化戊申仲春序, 出版年不明, 河内屋卯助(大坂), 早稲田大学図書館所蔵。訓点筆写。
- 96) 『形影夜話』卷上。訓点筆者。
- 97) 『緒方洪庵伝』, 28頁。
- 98) 『日本医学史』, 240頁。
- 99) 『日本医学史綱要』, 86頁。
- 100) 「好生堂醫學引痘沙汰控」。
- 101) 「御直書控」嘉永四年。
- 102) 「自然斎記」, 青木一郎編著, 『坪井信道詩文及書翰集』第1部, 岐阜県医師会, 昭和50年, 305~308頁。
- 103) 「反科学としての古方派医学」, 46~47頁。
- 104) 川田洋一, 「東洋と西洋の医学観」, 『東洋学術研究』第10巻第3号, 昭和46年10月, 18頁。
- 105) 『狂医之言』, 231頁。
- 106) ポンベ, 沼田次郎・荒瀬進訳, 『ボンベ日本滞在見聞録』, 雄松堂書店, 昭和53年(昭和43年初版), 276頁。

付表 萩藩医学校における蘭学者

姓 名	生 没	身 分・異 動	修 学 歴	職 歴
和田昌景	安永9 (1780) 嘉永4 (1851)	周防国熊毛郡八代村地下医藤本玄盛長男, 文化14 (1817) 萩藩医和田文京養子	土生玄碩門	天保11 (1840). 9 医学掛「眼科新書」担当
青木周弼	享和3 (1803) 文久3 (1863)	周防国大島郡和田村地下医長男	能美洞庵 (三田尻) 門, 斎藤方篲 (大坂) 門?, 坪井信道 (江戸) 門, 宇田川玄真 (江戸) 門	天保11 (1840). 9 翻訳掛, 嘉永2 (1849). 1 好生館会頭役, 同年9 引痘掛, 安政3 (1857). 6 好生館医学引立御用掛, 万延元 (1858). 10 好生堂助教兼任, 文久3 (1863). 4 好生堂教諭役
赤川玄成	文化元 (1804) 慶応2 (1866)	藩医赤川玄機嫡子, 天保11 (1840). 4 家督		天保6 (1835). 閏7 御添起医, 天保11. 9 医学掛「医療正始」担当, 嘉永2 (1849). 10 臨時引痘掛, 嘉永4. 2 好生館都講役, 安政3 (1857). 6 好生館医学引立御用掛, 慶応2 (1866). 1 好生堂御用掛
島田良俗	文化元 (1804) 明治10 (1877)	萩藩一門家老毛利蔵主家臣山根意休四男, 天保年間萩藩医島田家養子	佐藤泰然 (佐倉) 門, 高野長英 (江戸) 門	天保11 (1840). 9 医学掛「外科必読」担当, 嘉永2 (1849). 10 臨時引痘掛, 嘉永3. 6 外科頭取役 (阿蘭陀流)
久坂玄機	文化3 (1806) 安政元 (1854)	萩藩医良迪長男	弘化3 (1846). 8 京都遊学, 弘化4 (1847). 6 緒方洪庵門, 嘉永元 (1848). 3 同塾頭	嘉永2 (1849). 1 好生堂都講役, 同年9 引痘掛, 嘉永3. 6 都講兼御書物方
赤川玄悦	文化5 (1808) 明治23 (1890)	熊毛郡大河内村藩士金子藤右衛門次男, 文化6 (1809) 萩藩医赤川分家養子, 家督	文政11 (1828) 小石元瑞 (京都) 門	天保13 (1842) 医学掛「瘟疫論」・「内科撰要」担当, 嘉永2 (1849). 1 萩藩医学学校会頭役, 引痘掛, 安政4 (1857). 1 御添起格, 世子侍医, 安政5. 12 御添起医, 藩主侍医
竹田庸伯	文化8 (1811) 明治29 (1896)	萩藩医 (鍼科) 松島正悦次男, 天保6 (1835) 萩藩医竹田本家分知・独立	天保8 (1837) 高良斎 (大坂) 門, 嘉永3 (1850) 頃川本幸民 (江戸) 門	天保15 (1844). 12 医学館蘭学掛周弼補佐, 嘉永元 (1848). 4 御添起医格, 嘉永2. 10 臨時引痘御用掛, 嘉永5. 1 御添起医, 万延元 (1858). 2 好生館原書頭取役, 同年7 好生堂都講役, 文久元 (1861). 3 御側医兼任, 世子・世子夫人侍医
佐方玄琳	文化9 (1812) 安政5 (1858)	藩医佐方家生		嘉永2 (1849). 10 臨時引痘掛, 嘉永3. 6 産科頭取役, 安政3 (1856). 12 藩主夫人付
二階玄東 (養安)	文化11 (1814) 明治3 (1870)	萩城内宮崎八幡宮神官白上舍人子, 藩医玄順養子, 嘉永2 (1849). 1 家督	天保末年医学館, 小石元瑞 (京都) 門	嘉永3 (1850). 12 好生館舎長, 同年6 好生堂会衆掛, 安政1 (1854). 6 御添起医, 安政2. 12 牛痘引種御用掛, 安政7. 3 藩主御側医
青木研蔵	文化12 (1815) 明治3 (1870)	周防国大島郡和田村地下医次男	天保2 (1831). 4 広瀬涼窓 (日田) 門, 天保8 (1837). 7 長崎遊学, 天保13. 8 長崎遊学, 天保14 伊東玄朴 (江戸) 門	弘化4 (1847). 2 西洋書翻訳御用掛, 嘉永2 (1849). 9 牛痘種痘法修得のため長崎出張, 嘉永3. 6 西洋原書頭取役, 嘉永5. 2 好生館都講役, 安政2 (1856). 9 西洋学師範, 文久3 (1863). 4 世子館侍医, 元治元 (1864). 3 好生堂教諭役, 同年6 藩主御側医
田原玄周	文化12 (1815) 明治2 (1869)	藩医秀安子, 天保5 (1834). 1 家督	天保12 (1841) 筑作阮甫 (江戸) 門, 伊東玄朴 (江戸) 門	西洋原書頭取役, 嘉永3 (1850). 6 西洋原書頭取役, 嘉永6. 4 鍼治頭取役, 安政1 (1854) 春相州警備萩藩軍医, 安政2. 9 西洋学師範, 安政6. 8 西洋学御用掛, 文久3 (1863). 12 御添起格, 元治元 (1864). 10 傳習堂師範役

森川：好生堂頭取役青木周弼

姓 名	生 年	身 分・異 動	修 学 歴	職 歴
田上宇平太	文化14(1817) 明治2(1869)	藩士高杉又兵衛子、藩士田上平兵衛養子、嘉永4(1851). 9家督	弘化4(1847). 9伊東玄朴(江戸)門	安政2(1856). 9西洋学師範掛、長崎開校
仁俣玄珠	文政2(1819)	藩医玄哲子、嘉永6(1853)家督	天保14(1843)阿部分叔(筑作阮甫塾長)門	嘉永3(1850). 12好生館舎長、嘉永3(1850). 6好生堂会業掛、安政元(1855). 7好生館都講役、安政2. 7喜久姫附
栗山厚庵	文政4(1821) 明治20(1887)	萩藩士飯田七兵衛長男、天保3(1832). 11藩医栗山幸庵養子	天保11(1840). 9医学館、弘化2山脇東洲(京都)門、川本幸民(江戸)門	文久元(1861). 2好生堂原書頭取役、文久2. 2元藩主齊熙五女八重姫附、慶応3(1867). 8藩世子元徳夫人銀姫附・世子附
東条英庵	文政4(1821) 明治8(1875)	一門家老右田毛利氏家臣永玄子	天保11(1840). 8青木周弼(萩)門、弘化元(1844)緒方洪庵(大坂)門、弘化2(1845)伊東玄朴(江戸)門、川本幸民(江戸)門	弘化4(1847). 2西洋書翻譯御用掛、嘉永6(1853). 9萩藩一代御雇医、安政1(1854)春相州警備萩藩軍医、安政3. 4蕃書調所教授手伝、同年11幕府軍監操練所教授、安政5. 3萩藩蘭書会読会メンバ―、同年11姉藩・西洋学所規則制定、「右醫業差免束髪申付候」、安政6. 4幕臣
松尾修庵	文政4(1821) 明治21(1887)	一門家老毛利筑前家臣吉村龍沢子、弘化3(1846)萩藩医養琢養子、慶応3(1867)家督	安政3(1856)秋長崎、ハルデス、ボンベ師事、安政5(1858)藩費伝習生	嘉永5(1852). 1貞操院附侍医、安政2(1855). 7法鏡院附侍医、元治元(1864). 11世子・世子夫人附侍医、慶応元(1865). 4世子長男興丸牛痘接種
中島治平	文政6(1823) 慶応2(1866)	朝鮮通詞中島正貞長男	安政3(1856)秋長崎、ハルデス、ボンベ師事、安政5(1858)藩費伝習生	万延元(1860). 8硝子製造諸見合役・分析試験御用掛、元治元(1864). 1好生堂舎密頭取役
竹田祐伯	文政8(1825) 明治14(1881)	萩藩士深瀬三郎兵衛次男・嘉永2(1825). 6竹田庸伯養子	柴田方庵(江戸)門	安政7(1858). 2原書頭取役、万延元(1836). 7好生堂都督役、文久3(1863). 4好生堂助教役、同年11御添起医格、同年12好生堂教諭役心得
能美隆庵	文政8(1825) 明治23(1890)	萩藩医酒庵長男、文久3(1857). 2家督	青木周弼(萩)門	嘉永4(1851). 2好生館舎長、安政2(1856). 9西洋学師範、文久3(1863). 4好生堂御用掛兼引成御用掛
松島瑞益	文政8(1825) 元治元(1864)	萩藩医松島瑞晴長男	青木周弼(萩)門、坪井信道門	嘉永6(1853). 4西洋原書頭取役、安政元(1855). 3世子江戸随行、安政2. 9西洋学師範・長崎伝習、安政4. 6西洋学所師範役
日野宗春	文政10(1827) 明治42(1909)	大島郡久賀村地下医山県玄敬三男・萩藩医日野貞庵養子	嘉永元(1848). 3青木周弼(萩)門・嘉永4. 8緒方洪庵門・安政元(1855). 8長崎遊学	万延元(1860). 4好生堂舎長、元治元(1864). 6好生堂本草局御用掛、慶応元(1865). 4山口病院総管、同年10山口好生堂助教兼任
坪井信友	天保3(1832) 慶応3(1867)	信道長男	堀内素堂(江戸)門、緒方洪庵(大坂)門	嘉永元(1848). 11萩藩医(江戸在住)、蘭書会読会メンバ―
松村玄仲(太仲)	生年未詳 慶応4(1868)	萩藩一門家老吉敷毛利家家来玄機長男	周弼門?	弘化4(1847). 2西洋書翻譯御用掛、嘉永2(1849). 10臨時引痘掛、慶応元(1865). 9一代藩医、好生堂都講役、慶応3. 4石州病院総管
島田敬藏(圭三)	天保元(1830) 明治16(1883)	周防吉敷郡鷺頭氏次男・島田良俗の実家山根家養子	嘉永6(1853). 5伊東玄朴(江戸)門	文久3(1863). 4好生堂都督(原書教授)、同年12好生堂教諭役心得

姓 名	生 年	身 分・異 動	修 学 歴	職 歴
李家文厚	天保 6 (1835) 大正 6 (1917)	萩藩士吉松良右衛門長男、弘化 4 (1847) 萩藩医龍庵養子、文久 2 (1856)、12家督	好生堂	万延元(1860). 4 好生堂舎長、文久 3 (1863) 春赤間病院副総督、慶応元(1865) 吉田病院総管、慶応 3. 11萩藩軍医
半井春軒	天保 7 (1836) 明治 39 (1906)	栗屋織之助二男、天保15(1844) 萩藩医半井玄友養子、嘉永元(1848). 9 家督	好生堂、安政 5 (1858) 江戸遊学、芳野金陵門、文久 2 (1862) 長崎遊学、松本良順門、ボンベ徒学	安政 2 (1855). 2 好生堂舎長、文久元 (1861). 8 赤間病院医員、慶応 4 (1868). 1 病院総管
赤川玄樸	天保 8 (1837) 明治 36 (1903)	萩藩医品川玄良二男、萩藩医赤川玄成養子、慶応 2 (1866). 7 家督	好生堂、安政 2 (1855). 2 入舎生、安政 6 (1859) 川本幸民 (江戸) 門、佐藤泰然 (佐倉) 門	文久 3 (1863). 4 添匙格 (崎出雇) 世子侍医、赤間病院総督、慶応 4 (1868). 5 添匙医、好生堂御用掛
久坂元瑞	天保11(1840) 元治元(1864)	萩藩医良迪三男	安政 元(1854). 6 好生館、安政 5 (1858). 9 村田蔵六 (江戸) 門	文久 2 (1862). 3 好生堂舎長、同年 4 兵庫出張、元治元(1864). 7 輪御門の変にて自刃
長野玄琢	文化14(1817) 没年不明	萩藩医玄琢子、文久元(1861). 11家督		弘化 3 (1846). 8 医学稽古場御書物掛、嘉永 2 (1849). 10臨時引痘掛、嘉永 3. 6 好生堂会業掛、嘉永 5. 5 好生館舎長、嘉永 6. 2 好生館薬園掛
曾杵玄育	生没年未詳		嘉永 2 (1849). 10臨時引痘掛	
中原玄快	生没年未詳		安政 7 (1860). 4 長崎派遣、文久元 (1861). 9 直伝習生、ボンベ	安政 6 (1859). 2 好生館舎長
上領道仁	生没年未詳	萩藩医道立養子	安政 7 (1858). 4 長崎派遣、文久元 (1861). 9 直伝習生、ボンベ	安政 6 (1859). 2 好生館舎長
松岡勇記	明治29(1894)	松岡良哉養子	広瀬淡窓 (豊後日田) 門、緒方洪庵 (大阪) 門	元治元(1864). 1 好生堂舎長
田原玄章		田原玄周子		慶応元(1865) 間 5 好生堂舎長
松村玄中				慶応元(1865). 6 好生堂舎長
福田正二	弘化 3 (1846)	地下医長男	青木家門人、文久 4 (1864) 春好生堂	慶応 2 (1866) 山口好生堂助教

註 1) 『防長医学史』、『青木周弼』などにもとづき作成した。

2) 原則として出生年代に順に配列した。

Zusammenfassung

Shūsuke Aoki als Vizeleiter der medizinische Schule (Kōseidō) in Hagi-Daimyat

MORIKAWA Jun

Im Februar 1839 wird Shūsuke Aoki zu einem Leibarzt des Hagi-Daimyats ernannt. Er ist der erste Leibarzt, der die abendländische Medizin erlernte. Am Anfang beschäftigt er sich mit Übersetzung der Materialien über die Küstenverteidigung. Er wird im Januar 1849 zum Vizeleiter der Medizinschule des Hagi-Daimyats ernannt. Im Herbst des nächsten Jahres abfasst er die Bestimmung für die Medizinschule auf Verlangen des Leiters Tōan Nōmi. In dieser Studie möchte ich aufklären, wie er die abendländische Medizin in den Lehrgang der Medizinschule auf dem Grund der altchinesischen Heilkunde einführen wollte.